
島のパーティー

酒井 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

島のパーティー

【Nコード】

N1204Q

【作者名】

酒井 真言

【あらすじ】

海外を放浪した男の随筆を読み、大麻を吸う為に海外へ一人旅行に出たゆうじは、島のパーティーの噂を首都で会った人から聞く。旅行らしい刺激と大麻を求めて島へ渡り、様々な目的を持った人と出会い、一緒に行動して島のパーティーを迎える。

客船の後部に僕は座っていた。甲板にはエンジンルームに続く階段があり、その段に腰かけて、隠れるように座っていた。けたたましいエンジン音を聞きながら、船体に引かれる途切れることのない二本の波と、スクリューが巻き上げる水しぶきと、群がる海鳥を眺めていた。

岸を出発した時はまだまじだった。テレビでしか見たことのない、コーヒー牛乳色の河を船は進み、岸に放置された廃船の上を歩く男の子と犬を見て、見知らぬ土地へ向かう冒険心を騒がせていた。僕は勇敢な“のび太”だった。昔に観た『ドラえもん』の映画（名前は忘れたが）に出ていた犬は、二本足で歩き、言葉を話し、剣を振る。僕はその映画の一場面にいるかのようで、溢れだすように生い茂った密林の中を進む、“ドラえもん”達を思い浮かべた。

だが、僕の隣に“ドラえもん”はいなかった。河岸に着くまでのバスの移動の間、僕を一晚中苦しめたあいつだ。あいつが再び襲ってきて、僕を助けるすべを持った人は誰もいなかった。そもそも、人に助けてもらえるわけがない。助けてくれるのは人じゃなくて、物、便器という名の懐の深い物だ。

河岸にある小屋のわきで三回下痢便を出して、腹の調子は落ち着いてと喜んでいた。ところが、河から海に出て、太陽に照らされた海水が青味がかかった頃、僕の開放的な心は一瞬で海の底に沈められてしまった。何度も味わった腹痛が込み上げてきた。僕は急いで甲板から船内に入り、人で埋めつくされた空間を無理やりに押し通っ

て、どうにかトイレへたどり着いた。人が多すぎた！ 小学生の時の、あの、朝の朝礼のように時間は感じられ、僕は眼を大きく見開いたまま、とにかく便通に耐えた。

大事にはいたらず、ようやく僕に順番がまわってきた。狭く臭いトイレでほっと一息ついた。このままトイレを占領しよう。いつ腹痛が襲ってくるかわからない、この空間から出てしまえば、「また襲ってくるかもしれない」と疑念にかられてしまう。

だが、そもいかなかった。なにしろ人が多かった。それにトイレはこの客船に一つしかなかった。なら、今のうちに出せるだけ出してしまおうと考えた。下腹部に力を入れて気張るが、腹筋に力を入れているだけで、手ごたえを、いや、腹ごたえを感じなかった。それでも力を入れ続けると、ドンドン、と扉を叩かれた。

「ああ、タイムリミットがきてしまった！」と観念して僕はトイレを出た。

腹痛のせいか、バスの中であまり寝てないせいか、それとも疑念のせいか、いや、それらが重なりあったのだろう、僕はひどく気分が悪くなってしまった。新鮮だった海の景色にはすっかり慣れてしまい、晴れた青空も、心地よい陽射しも、爽やかな海風も、僕に好ましい影響を与えなかった。外国人から話しかけられないように居場所に気をつけて、少しでも腹に刺激を与えないように、自分の意識を逸そらせることだけを考えて。そして、はやく“島”に着くように願っていた。

僕は“島”に向かう理由はあったが、前々から行きたいと思っていたわけではない。別に“島”じゃなくて“山”でもよかった。たまたま“島”であって、あるいは“川”でもよかったのだろう。と

いうのは、船に乗る前日の朝に“島”の存在を知ったからだ。それに、僕は一週間前に“島”のあるこの国へやって来た。初めての海外旅行だ。

数年前、電車で十五分の距離にある大学がやけに遠く感じてしまい、本格的にのめりこんでいた大麻を吸っては、学校に行かないで漫画喫茶に入り浸^{びた}っていた時期があった。寒さが深まってきたある日、仲の良い友人が一冊の本を貸してくれて、それがきっかけで海外旅行を意識するようになった。海外を放浪した男の随筆であるその本には、たつた一人で世界各国をまわり、さまざまなおドラッグを試して、気楽な生活を送っている男が書かれていた。

ちょうどその頃、いかに大麻を安く手に入れるかを追及していた僕は、バイトの先輩から、ハウスタブの充満する部屋を借りていた。部屋の片隅に置かれた、黄土色のロックウールからは、弱々しいかいわれ大根が生えていて、僕は、眼をしきりにこすり、鼻をすすって、本に描かれている世界に胸をときめかせながら、密かに世話をしていた。

僕は大麻を吸いに海外に来た。タバコは吸わないくせに、四六時中タンをからませ、眼を赤く、まぶたを腫れぼったくさせるためにやって来た。ステンレスの耳かきで肺の内側を削れば、真摯^{まなざし}な眼差しの陸上青年の黒眼ほど、汚れの塊^{かたまり}がとれるくらいにだ。伸びきった鼻毛に黒い粘着物がこびりつき、鼻水をすすれば思わず頭がぐらつくか、粘膜に炎症を起こして、腐敗した水道管のように、サビまじりの血を流すくらいにだ。

ところが、僕は首都に着いたその日から、まる二日は身動きがとれなかった。初めての海外を甘くみていた。肌の色が違う、言葉が通じない、臭い、それらのことが、なんとか辿^{たど}り着いた宿の、半径

五十メートルより先には出させなかった。

けれど、同じ宿にいた若い男の日本人と知り合ってから、その二日間が嘘のように街に溶けこんだ。各国から訪れる旅行者と、現地の人間が入り混じる湿気った街が、耳をつんざくクラクションの不協和音を鳴らす頃、僕は街の細胞の一員として、どことなく動きまわった。

そのまま数日が過ぎて、宿の一階にあるプラスチックのテーブルに群がる、日本人旅行者達の一員になりはじめていた。

そして、毎日顔を合わせていた日本人数人を、見かけなかった朝だった。最初に知り合った長髪の若い男に、彼らがこの街を離れたことを知らされた。僕は気分が落ち着かなくなってしまった。そんな僕を察してか、長髪の男は“島”の体験談を聞かせてくれた。僕は教えてもらったツアー会社へ足早あしはやに歩き、価格を気にせず、その日に出発できるチケットを手に入れた。

僕は息を弾はませて宿へ戻り、散らかっていた荷物を逃げるかのよううにまとめた。夕方、僕は一人“島”へ向かった。

二

河岸を離れてから四時間が経過すると、船は白い雲の下に浮かぶ“島”に着いた。僕はトイレに一度行ったきり便意がなくなり、窮屈な船から地上へ降りられるうれしさに、下痢の疑念はどこかに消えてしまった。

船は堤防に横づけした。英語で書かれた紙を持つ、茶色い肌の客引きが数十人、にぎやかに待ち構えていた。僕は一ヶ所に集められた積荷に強引に近づいて、カラフルな積荷の山から黒のバックパックスを探し出し、船を降りる人の列に加わった。

「あら、あなた、日本人？」

しゃがれた声が僕に話しかけた。振り向くと、背の低い女性が立ち、その隣には汗ばんだ男がいた。

「は、はい。あなたも日本人ですか？」僕はむけられた質問を返した。

「そうよ、わたしも日本人よ。同じ船だったのね、一度も見かけなかったけど、どこにいたの？」べとついた髪を肩に乗せる女性は、涎刺と声を出した。

「ぼくは甲板にずっといたんです。船内は人でいっぱいだったので」

「そうなのよ、すごい人の数よね、さすがフルムーンパーティーに」

近だけあるわ。わたし達は船内にいたのよ、どつりで見かけなかったわけだわ。そうそう、この人はチャッキーといって、バスの中で知り合った人なのよ」女性は隣の男に顔を向けた。

「ぼくはチャッキーっていうんだ、よろしくね」薄茶色の短い髪をしたチャッキーさんは、立派な体格を揺らし、細い目で僕を見て言った。

「よろしくです、ぼくはゆうじつて言います」僕は丁寧ていねいにこたえた。

「わたしはレモンっていうの、よろしくね」レモンさんは微笑ほほえみながら元気よく言った。

船を降りてから、僕はおそろおそろ訊ねた。

「二人はフルムーンパーティーが目当てで“島”へ来たんですか？」

「もちろんよ、あなたもそうじゃないの？ わたし達今回が初めてなのよ」

「そうです、ぼくも初めてなんです。どこでやるかわからないし、泊る宿もわからない、それに、日本人はだれもいなくて、船の上で震えていたんですよ」僕はおどけた口調で言った。

「あら、そうだったの？ わたし達も泊る宿を決めていないのよ。ねえ、せっかくだから一緒に行動しない？」綺麗というよりは、かわいらしい顔のレモンさんはさらっと言った。

「それはいいですね！ それがいいです！ いや、ほんと助かります。じつは、わんさかという客引きを見て、どうしようかと思って

いたんです」胸のつつかえが取れて、僕は明るい調子で言った。

「ほんと、この客引きの数にはびっくりだよね」チャッキーさんは微笑みながら言った。

こうして僕は、さばさばしたしゃがれ声のレモンさんと、生えかけの髭で顎を青くした、体格のわりにおとなしいチャッキーさんと一緒に行動することになった。船の上での陰鬱な心持は晴れて、広がる青空と生命力あふれる島の木々を見ると、ようやく南の島に着いたのだと実感した。胸は未知なる期待でうずうずしていた。

陸地へ続く堤防の一本道は、旅行者と客引きの交渉がいたるところで行われ、小さな市場のようだった。近づいてくる客引きを笑いながら断りつつ、堤防の上を歩いた。二人ともTシャツと短パン姿に、僕よりも大きなバックパックを背負っていた。

「あの人たちは、毎日港で待ちかまえているんですかね？」僕はチャッキーさんにおもわず質問してしまった。

「さあ、どうだろうね」チャッキーさんは僕をちらりと見て、前方を向いた。

「ちよつと多すぎるわよ、フルムーンパーティーに近いのもあるんじゃないかしら？」レモンさんは額から汗を垂らして言った。

広い道へ出たところ、レモンさんは数台並んでいるトラックの方へ進んだ。僕は後ろからついていった。トラックの荷台には長イスが設置されていて、体の大きな白人が三人、大きなバックパックを抱えて、ちよこんと座っていた。レモンさんは近くにいた運転手らしき人に話しかけた。

「どこかに移動するんですか？」僕はチャッキーさんに聞いた。

「そうだよ、パーティーのあるビーチの方へ行くんだよ」「チャッキーさんはやわらかな口調で答えた。

「てっきり、港の近くでパーティーがあるのだと思ってましたよ」と言ったが、実際はそこまで考えていなかった。

「二十B出せば、ビーチに近い繁華街へ連れていってくれるらしいわよ、さあ、乗りましょう」「レモンさんは僕とチャッキーさんに声をかけた。

色あせた水色のトラックの荷台に乗りこんだ。白人の目の前に座ると、「ハロー」と声をかけられた。口元を緩めて僕もあいさつをした。

数分すると荷台は人で一杯になり、運転手らしき短髪の男が出発の合図らしき声をあげた。声と同時に白人の若い男女がトラックに近寄り、男と話してから荷台に乗りこみ、わずかに空いていたスペースを埋めると、車は重そうに発進した。

僕は眼を輝かせ、きよろきよろしていた。汗を乾かす心地よい風が上半身をつきぬける。僕はかぶっていたニット帽を素早く脱いで、荷台の端をつかんだ。目の前の白人は楽しそうに会話していた。

「気持ちいいな！ チャッキーさん、今日は天気がいいですね」「僕は隣に座っているチャッキーさんの顔をのぞいた。

「ああ、そうだね」「チャッキーさんは大きい声で返事した。

僕はそれを聞いてうれしくなり、通り過ぎていく風景を眺めた。背の高い椰子の木やふさふさした柔らかい芝、緑の強い植物達が遅くも早くも過ぎていく。ヘルメットをかぶらずにバイクを運転する旅行者や、二人乗り・三人乗りしている島民が、対向車線を通り過ぎた。英語表記された看板を並べた商店が去っていく。四駆の車がトラックを追い抜き、乗っている白人が陽気に声をあげた。

道はするどい角度の傾斜になり、エンジンをうならせて車は進んでいった。坂を上りきると、前方に景色が開けてコバルトブルーの海が広がっていた。きらびやかな海面は透きとおり、太陽をゆらゆらと反射させている。

「チャッキーさん、すばらしいですね！」僕は叫ぶように声を出した。

「そうだね、とてもきれいだね」チャッキーさんは遠くを眺めながら答えた。

「立ち止まって写真を撮れないのが残念ですね」僕は荷台をつかんでいる腕に力をいれた。

トラックは急な坂道を何度も上り下りしたあと、直線の道を通った。しだいに民家が増えはじめた。凸凹の道へ曲がると、水溜まりが点々とする空き地へ着いた。空き地には車が三台停まり、数人が暇を持って余すように雑談している。白人が席を立ったので、僕はつられて席を立った。

「レモンさん、ここですか？」

「そうねえ、たぶんここじゃないかしら」

レモンさんはあたりを見まわして答える。運転手が降りて何やら声を出すと、乗客は次々と荷台を降りた。

「何もないところだね、どこが繁華街なのだろう?」チャッキーさんが誰に話しかけるわけでもなく言った。

「そうですね」僕はあいづちをうった。

「繁華街はどこなのかしら? それらしい雰囲気はないわね。でも、これだけ乗客がいるから、近くにありそうじゃない」レモンさんは僕とチャッキーさんを交互に見ながら言う。

「はやく宿を見つけておちつきたいわね。昨日から移動のしっぱなしでさすがに疲れたわ」レモンさんは首を振りながら言った。

「じゃあ、まずは宿を見つけましょう」僕は頷いて言った。重い荷物を置いて、はやく“島”での自分の場所を得たかった。

他の乗客の半分は歩いてどこかへ行き、もう半分は空き地にいた客引きと話していた。すると麦わら帽子をかぶった長髪の男が、僕たちに話しかけてきた。アロハシャツを着たその男は、眼がりりしく、たんせい端正な四角い顔をしていた。

英語力の乏しい僕はレモンさんの方へ振り返った。すぐにレモンさんは数歩前へ出ると、その男と会話をはじめた。僕とチャッキーさんはわからないながらも、二人のやりとりを無言で見っていた。

「目の前がビーチの宿があるらしく、車で連れて行ってくれるそう

よ。それもタダで」

眼を少し見開いてレモンさんが言う。レモンさんは確かめるように男に話しかけた。男は笑いを浮かべて答える。

「どうする？ その宿を見に行く？」

「いいですよ。安くて寝る場所があれば、なにも文句はありません。僕は自信ありげに言った。

「うん、ぼくもかまわない」チャッキーさんはどうでもよさそうに答える。

「そう？ それなら行ってみましょう」そう言い、レモンさんは男に手振りをまじえて話した。男は停まっている軽トラックを指した。

レモンさんが助手席に乗り、僕とチャッキーさんは荷台に乗った。白人の中年男性も一人乗りこんだ。

「ビーチの前って、どんな宿ですかね？」僕は目の前に座っているチャッキーさんに声をかけた。

「はやく宿が決まるといいね」チャッキーさんは表情をかすかに動かさず、そう答えた。

数分走ると、桃色や山吹色やまぶきといった、明るい建物が立ち並ぶ道を通りすぎた。オープンテラスのレストランや、雑貨や洋服が売られている店を見て、この辺りが繁華街なのだと思った。歩いている観光客の多さが、何よりもそう思わせた。「このあたりに泊まれたら楽しそうだな」と思ったが、軽トラックは走りつづけた。

建物が減ると人の気配がなくなり、細い山道に突入した。僕は繁華街からあまり離れなければいいと思った。

木の根がよこぎる土の道を登ったと思ったら、急角度の道を降りていく。荷台の上を沸騰ふっとうしたようにバックパックが跳ねて、僕は振り落とされないように両手に意識を集中していた。そのわりに、顔は満面の笑みであふれていた。

「はっはっはっ、ひどい道ですね！ 車が今すぐにも横転しそうですねよ、ほら、また、はっはっはっ！ こんな、遊園地のアトラクションでもないですよ、楽しいですね！」

僕は腹の底から湧わき上がる笑いをそのまま声に出して、チャッキーさんに話しかけた。チャッキーさんは顔をしかめたまま、何も言わない。僕は隣に座る白人に目配せした。中年の白人はまぶたをびくつとあげる。僕は跳ねあがる尻と腰に合わせて首を振った。

道を下りきると、オープンテラスの大きなログハウスの傍そばに車は停まった。すぐ目の前には白い砂浜と海が広がり、白いコテージが

いくつも建っている。ビーチには水着姿の白人が数人寝そべっていた。

楽しい一時を過ごした後、目の前に南国の景色を見ては、僕は繁華街から離れていることをすっかり忘れてしまった。荷物を背負い、荷台から降りて周りを見まわした。背後は森に囲まれて、まさしくプライベートビーチといった場所だ。疲れた顔をしたレモンさんが、重そうに助手席から降りてきた。

「なにあの山道！ まったくひどいじゃない！」レモンさんは吐き捨てるように言う。

「ほんと、首から上がとれそうでしたよ。でも、ここはロケーションがいいですね？」僕はにやにやしながら言った。

「悪くないわね。目の前は海だし、レストランも洒落しゃれていて、なかない場所ね。でも、あの道がね、ちょっと繁華街から遠くて不便そう」

レモンさんは眉間みけんに皺しわを寄せて言うと、長髪の運転手が近寄ってきて、レモンさんに声をかけた。レモンさんは大声で話した。どうやら宿の説明を受けているようだ。

「一番安いバンガローで一泊二千Bだってさ！」レモンさんはあきれた様子で言う。

「ムリムリ！ いや、ぼくはムリですよ！」僕は手をふりながら答えた。

「ちょっと高いね、ぼくも遠慮しとくよ」チャッキーさんは落ち着

いたようすで言う。

「わたしも、そんな金を払って泊まる気はないわ」

レモンさんがそのことを長髪の男に伝えたと、男は笑いながら何やら話をした。

「エアコン無しでよかったら、二百Bのバンガローがあるってさ。どうする？」レモンさんは言う。

「二百ですか、それなら泊まっていいかも。ぼくはかまいませんよ」他の宿を探すのが面倒だったので、僕はそう答えた。

「ぼくはちよつとな、部屋を見てみないとなんともいえない」チャッキーさんは言う。

「そうね、見てみないことには決めれないわ」

レモンさんがそう言い、男に部屋を見してもらつよう話した。男はうすら笑いを浮かべて、了解したようすだった。

男に案内されたバンガローは森の奥で、陽のあたらない場所にあった。まるで忘れられたかのような小屋は、部屋がカビ臭く、湿気ったベッドがあるだけだった。

「これは、ちよつと」話にならないといったようすで、レモンさんは言う。

「一晩眠ったら、体からキノコが生えそうですね」僕は馬鹿にしたようすに言った。

「じめじめしているね」チャッキーさんは眼を細めて言う。

「ほかの宿にしますか？」僕は二人に訊ねた。

「そのほうがいいね」チャッキーさんは言った。

「じゃあ、はいとこ戻って、他の宿を探しましょ」

レモンさんはそう言い、男に別の宿にすると伝えた。男はあきれたように両手をあげると、レモンさんに長々と話した。レモンさんは顔をひきつらせてから、冷静な調子で男に話した。男は顔をにやつかせ、首を横に振ったあと、諭すようにゆっくりとした口調で話をした。レモンさんは男の顔をきつと睨んだ。

「さあ、行きましょー！」

「どうしたんですか？」僕は真顔で聞いた。

「あんなひどい山道を、歩いて戻るわけにはいかないでしょ？だから、わたし達を乗せた場所まで送ってちょうだいと言ったのよ。だって、宿が気に入らなかったら、遠慮なく断ってくれと言っていたのよ。元の場所まで送ってくれるのかと思うじゃない、なのに、この長髪の男は、送らないって言うのよ」

レモンさんは感情の向くまま声をあげる。

「えっ！あの道歩くんですか？僕も送ってもらえるものだと思ってきました。歩くの嫌ですよ」僕は楽しかったあの道を、とても歩く気はしなかった。

「でしょ？ そう思うでしょ？ なのに、この男はそこにつけこんで、歩いて帰るのが嫌なら宿に泊まればいいじゃないか、と言うのよ。それも人を小馬鹿にしたように、なによあいつ、何様のつもりよ！」

「それはひどい！ 計画的だね、ぼく達を最初からはめるつもりでここへ連れてきたんだ」

チャッキーさんが声を荒げて言った。男は僕達の会話をうすら笑いを浮かべて聞き、勝ち誇ったような顔をしている。

「くそつたれだ！ この人はくそつたれですね！」

僕は男の顔を見てけなすつもりで言った。男の眼はずるそうに輝いていたが、冷たい自信にも満ちていた。僕はその眼を見て、一瞬、恐怖を覚えた。

「もう行きましょう！ この男のそばに一秒でもいたくないわ！」
レモンさんが前へ歩き出した。チャッキーさんも後ろからついて行く。

「でも、どうするんだい？ 歩いて元の場所へ戻るのかい？ あの道をかいて？」
チャッキーさんは気づかせるように、はっきりとした声で言った。

「ええ、そうよ、それしかないでしょ？ 歩いて戻りましょう！ それとも、他に何かあるとでもいうの？」

レモンさんは足を止めて、チャッキーさんを見下して言う間に、

僕は二人に近づいた。

「ちょっと待ってください、せつかく三人いるんだし、どうするか考えましようよ」僕は言った。

「そうだ、もっと冷静に考えよう」チャッキーさんも続けて言う。

「そう？ 考えることなんてある？」レモンさんはいじわるそうに言った。麦わら帽子の男は、顔色を変えずにこちらを観察している。

「じゃあどうするか考えましよう。ぼくが思うに、今自分たちが選べる単純な選択は、ここで泊まるか、元の場所に歩いて戻るか、ですよね？」

「な^まに^は的^は外^はれ^はな^はこと^は言^はつ^てる^のよ！ ここに泊まるわけないでしょ」

「そうだ、ここに泊まるのは危ない。ぼくたちをこんな目に合わせた男の宿だ、なにがあるかわかったもんじゃない」

「あつ、すいません、そう言われると危険ですね。宿代を高く請求されるかもしれないですね。荷物を盗まれるかもしれないですね。たしかに安心できませんね」

考えようと言い出した僕が、何も考えておらず、恥ずかしくなっ

た。
「馬鹿！ そんなんじゃないわよ、あんなやつ^の宿に泊まるだけでぞっとするわ」レモンさんは男をちらつと見て、憎々（にくにく）しげに言った。

「どつちにしろ、ここで泊まることはなさそうだね。となると、やっぱり元の場所に戻って、別の宿を探さなくちゃいけないな」

チャッキーさんはわずかに微笑ほほえんで言った。

「やっぱりあの道を歩いて帰るんですか？ あの山道、ハイキングコースですよ」

「そうよ、ここで泊まるよりはマシでしょう？」

「うん、そ、そうですね、うん。それならですよ、ビーチを歩いて戻りませんか？ 山道を歩くよりも楽だし、気分的にも楽しそうじゃないですか？ それに、ビーチを歩いていけば、パーティーが開かれるビーチに着いて、その近辺の宿に泊まれるかもしれないですよ。せつかく南国の島に着たんですから、ビーチを歩きますか？」

「ああ、それはいいね。この宿みたいに、ビーチ沿いの宿を見つけれられるかもしれない」

「じゃあ、そうしましょう」

話は難なくまとまり、三人してビーチの方へ歩き出した。長髪の男がなにやらわめいていたが、気にせず歩き、白人が寝そべっているそばを横切った。太陽は頭上で燦々さんさん（さんさん）ときらついて、白い砂浜を熱く照りつけていた。

四

昨夜からほとんど食べ物をお口にしておらず、寝不足と移動の疲れがあった。にもかかわらず、ずしりとするバックパックを背負い、ビーチを歩くのがさほどつらくはなかった。レモンさんとチャッキーさんは口数が少なく、足取りは重かったが、宿を探すためにとにかく歩いた。見るからに高そうな宿を数軒見つけては、だめもとで訊ねた。その度に宿泊料の高さに驚かされて、泊まれない焦りがつづいた。

三人ともTシャツを肌張りつかせて、うつむきながら歩いていると、ほとんど飾られていない、簡素な作りの食堂を見つけた。そこで一休憩することにして、ビーチからそのままレストランへ入った。

砂が混じる板張りの床には、眠っている白人の男が一人いた。僕は荷物を床に置き、テーブルの前の座具に尻をつけた。店の人間がいないので、僕は立ち上がり外へ出た。

近くの小屋に近づくと、肌の茶色い、白髪交じりの髪を結った小さな女性がいた。眼が合い、使い慣れはじめた英単語で話すと、女性にはこやかに笑い、ドアが連なる横長の建物を指した。

僕はその女性と共に二人に簡単な説明をして、三人でその建物の部屋を見させてもらった。六畳ぐらいの空間にはベッドと古い扇風機が一つあった。他の部屋も見せてもらうと、似たような感じだ。窓は一つだけあり、わりと大きかった。三人で話しあった結果、一

泊百バーツの部屋に泊まることに決まった。

荷物を置いて宿泊の手続きを済ませ、それぞれ食事の注文をした。

「やっとおちつけたわね」「レモンさんが木のテーブルに肘をかけて言う。

「もう、腹ぺこぺこですよ」「僕は足を伸ばし、反らした上半身を腕で支えながら言った。

「でも、安い宿が見つかってよかった」「チャッキーさんがレモンさんの隣で頼杖ほおじえをつきながら言う。

「ほんとですよ」「僕は実感をこめて言った。壁のない食堂は潮風がおだやかに吹き抜ける。

「ずいぶん歩いたけど、ここは繁華街から近そうだ。こここのビーチには旅行客がけっこういるしね」「チャッキーさんがビーチに眼を向けて言った。

「いや、もう、目玉焼きですよ」「ビーチを歩いていた時のことを思い出して、僕は言った。

「さっき、宿のおばちゃんに聞いたらね、パーティーがあるビーチは近いと言ってたわ。歩いて十分ほどらしいわよ」「レモンさんが言う。

「おお！ そいつは最高ですね！」

僕は言った。黒髪を背に垂らす、眼のくりくりした若い女の子が

料理を運んできた。僕はフライドライスを受け取り、女の子の顔を見上げて、ちよいつと首をひねった。女の子は口元を緩めて、他の料理をテーブルに置いた。

「ああ、やっと食べれる」チャッキーさんは豚の生姜焼きと、白米の皿を手前に引き寄せた。

「この国に来て、すっかりフライドライスの虜になってしまいました。値段、量、味、どれも文句のつけどころがないですね」隣のテーブルから調味料を取り、僕は言った。

「この国は物価が安いから、満足に食べられるわね」レモンさんはサンドイッチを手に持って言う。

「そうです、フライドライスはたったの二十五Bですよ？ 百円かからずにおいしいごはんが食べれるなんて、僕はフライドライスがあれば十分生きていけます」僕は液体調味料を無造作にかけた。

「あら、かけすぎじゃない？」レモンさんは言った。

「これぐらいがいいんですよ、酸っぱ辛さと、癖になる生臭さがたまりません」僕は誇らしげに言った。

「わたし、パクチーが苦手だわ、どうも慣れないわ」レモンさんはサンドイッチの中から緑色の葉っぱを取り出して、皿の上に置いた。

「そう？ ぼくは平気だけどな」チャッキーさんは言った。僕は口を動かしながら頷いた。

僕はすぐにフライドライスを食べ終わり、一緒に注文したペット

ボトルのふたを開けて、水をごくごく飲んだ。二人はまだ食べていた。僕はうしろを振り返り、さざ波が打ち寄せるビーチに眼をやった。遠くに見える島は小さく、頭にふわふわの雲を載せている。海の中では、若い白人の男女が楽しそうに水をかけあっていた。僕はふいに自分のいる場所を考えてしまい、口をにやつかせた。

「ねえ、二人はこのあとどうするの？」食事を終えたレモンさんは、しゃがれた声で言った。

「何も考えていません」僕は笑いながら言った。

「ぼくも特に考えていなかったな」チャッキーさんも皿を端はじにどけながら言う。

「なら、バイクを借りて出かけない？ わたし行きたいところがあるの」レモンさんはガイドブックをテーブル上に開いて言った。

「ほら、この場所よ、アマ島という島よ」

僕とチャッキーさんは体をテーブル乗り出して、本に注目した。

「この島はビーチと陸続きで、歩いて渡れるらしいの。この本で読んだところ、このあたりからバイクで一時間ほどで行けるそうよ」「レモンさんは頭に思い浮かべたように言った。

「えっ？ 今から？」チャッキーさんは顔をゆがめて言った。

「もちろんよ」レモンさんは平然と答える。

「レモンさん、元気ですね！」僕は顔を上げて言った。

「あたりまえよ！　せつかく旅行に来たんだから楽しまなくちゃ！
行きたいところは、行けるとき行くのよ」

「でも、宿に着いたばかりじゃないか」チャッキーさんは静かに言う。

「そりゃそつだ」僕は言った。

「でも、やることないんでしょう？　バイクを借りて行かない？」

「ちょっと休ませてください」僕は言った。

「そうね、ちょっと休んでから行きましようか。荷物の整理もあるしね。じゃあ、三十分後にしましよう」レモンさんは僕とチャッキーさんの顔を何度も見る。

「わかりました！　行きましよう！」僕は勢いよく返事をした。

「わかったよ」チャッキーさんは眼を細めて言った。

「さつそく、会計を済まして部屋へ行きましよう」レモンさんは手を上げて言った。

「お姉さん！」僕は調理場の方へ声を出した。

「でも、ベッドに横になっちゃだめよ」

五

僕は特に用意することがなかったの、ベッドに腰掛け、メモ帳にこの島で必要な物を書きだした。水着、シュノーケル、そして大麻だ。首都では大麻が手に入らなかった。酒があったので必要としていなかったからだろう、その存在すら忘れかけていた。だが、“島”は素晴らしい自然にあふれる。僕の体は無意識に大麻を欲していた。「この環境で大麻を吸ったら？」と考えると頭が爆発しそうになり、顔がにやついてベッドに何度も頭を打ち付けた。僕はベッドの上で仰向けになり、両手を頭の後ろにまわして、“島”の生活に期待を寄せた。

「トントントン」

ドアをノックする音が僕の意識を覚ました。

「ゆうじ君、起きてる？ 行くわよ」

レモンさんの元気そうな声が聞こえた。僕はあわてて起きて、ドアを開けた。シャツを代えたレモンさんが立っていた。

「寝てた？」レモンさんが聞く。

「いえいえ、ばつちり起きてましたよ」僕は答えた。レモンさんの背後には、チャッキーさんが細い眼をして立っていた。

「えらいわ、さあ、行きましょう！」レモンさんはあどけない感じ

で言った。

店が点々と並ぶ道に出て、数分歩くとスクーターが何台も置いてある店を見つけた。店をのぞくと、白いシャツを着た細長い青年がテレビを見ている。レモンさんが声をかけた。青年はこちらに気がつき、表情を変えずに近づいてくる。

レモンさんが話を通すと、真つ赤なボディーまっかのスクーターが用意された。メーターをのぞくと、千キ口をまわっていなかった。青年からキーを受け取り、エンジンをかけると、素直にエンジンがかかった。

「このバイク調子よさそうですね」僕は言った。そして青年の顔を見た。青年がレモンさんに何か言った。

「おろしたてのバイクだから丁寧ていねいに乗ってくれ、だつてさ」レモンさんは言う。

僕は青年にむかって、ハンドルを握った手と、頭を小刻みに動かした。青年は眼と顔を心持上げてから、振り返って店の中に入った。

「ねえ、誰が運転する？」レモンさんが言う。

「運転していいですか？」僕はスクーターにまたがったまま言った。

「大丈夫？ 運転できるの？」

「まかせてください、これでも中型の免許を持っているんですから」

「そう？ ならお願いするわ」

「疲れたら言っつて、運転かわるから」チャッキーさんは僕の眼を見て言っつ。

「わかりました」僕は微笑みながら言っつた。

「では、アマ島へ行きましようか！」

レモンさんが真ん中に座り、チャッキーさんが後部へ座っつた。重くて不安定なスクーターはゆらゆらと走りだした。

僕はシートの前部に、尻をひっかけるように座っつていた。尾？骨に直接あたるようで違和感があっつたが、すぐ気にならなくなっつた。車体は思っつた以上に不安定で、スピードを出さないと安定しなかつつた。そのうえ、エンジンが唸るわりにスピードは出なかつつた。

「バイクは最高ですね！」

僕は後ろを向いて声を大きく出した。車の運転中でもそうだが、話しかける際に人の顔を見てしまっつ癖があっつた。それに、バイクの運転者の声は、後ろに座る人に聞こえにくいからだ。

「ええ！ でも、ゆっくりでいいから安全運転でお願い」レモンさんが耳元で言っつた。

「わかりました！」僕は大声で返事した。レモンさんの言葉は聞こえたが、意味はわかっつていなかつつた。

運転に慣れはじめたので、僕はトラックで通っつた急な坂道のことを考へた。まずは運転の感覚を取り戻すことに集中してあったからだ。

実際、バイクに乗るのは久しぶりだった。運転免許は持っていたが、以前乗っていたホンダのアメリカンタイプのバイクは、一年前に故障してしまい、それからはバイクにふれても、運転はしていなかった。

感覚を取り戻したところで、このバイクであの坂道を乗り越えられるのか、あらためて疑問に思った。むしろ、あの坂道があったから、僕は真っ先に運転を申し出た。レモンさんは問題外として、チャッキーさんは運転ができるのか？ もし、運転できたとしても、あの坂道を乗り越えられるのか？ 半日チャッキーさんと一緒にいたのをふまえ、僕は判断した。

三人乗りは予想以上にスクーターの馬力を削っていた。運転に慣れてきて僕は、「全速力で坂に入る必要があるぞ。あの坂は本気でぶつからないと負ける」と思った。

僕は全速力で道をとばして、一本目の坂を駆け上がった。勢いがあったスクーターは、坂の半分を過ぎると徐々にスピードが落ちた。僕は不安になった。のろのろと走り、なんとか坂を上りきった。僕は手ごたえを感じた。

しかし、ここからが本番だった。上りのことばかり気をとられ、下りをまるで考えていなかった。スクーターが下りに入ると、ジェットコースターが降り始める時の感覚がよみがえり、僕は思いきり顔をひきつらせた。

左右の手と眼に意識を集中させ、ゆっくりと坂を下りだす。一直線の坂ならば、それほどまで神経を尖とがらせることはないが、曲がる道の連続を記憶していた。僕はブレーキを臆病なほど繊細せんさいに扱った。スピードを出しすぎてしまえば、車体は道を曲がりきれずに横転す

る可能性がある。そこであせってブレーキをかけてしまえば、車輪はロックしてしまい、三人分の重りを載せたスクーターがこちらの意思を無視して進み、やはり横転しまう。僕は小刻みに握っては、放し、一定の速度を保った。

下り坂を半分ほど下りたところで、ブレーキを放し、スロットルを全開に開き、猛スピードで坂を下りた。そしてそのまま、壁のような上り坂をまた駆け上がった。

僕は笑いながら運転した。坂の連続はどうにか乗り越えられる気がした。それに、バイクの運転は楽しかった。

ひやっとする場面が数回あった。長い坂を上っている最中にバイクが止まってしまい、二人を歩かせる羽目にもなった。だが、それ以外のミスはなく、なんとか坂道の繰り返しを越えた。

「とんでもない坂道でしたね」僕はほっとして声を出した。

舗装された直線の道を走り続け、すれ違う島民や旅行者と何度も笑顔をかわしては、“島”の大部分を埋めている植物に目をやった。その度に驚沢な時間を過ごしていることをうれしく思い、バイクのスピードを上げてしまった。レモンさんに注意されて速度を落とし、冷たくなった風を感じた。

港にたどり着き、僕は防波堤の手前にバイクをとめた。

「ちょっと、スピード出しすぎじゃない？」レモンさんがバイクから降りて言った。

「そうですか？ あんなもんじゃないですか？」僕は大きく息を吐

いてから言った。

「はやく感じるわ」

「でも、はやく行かないと日が暮れちゃいますよ」僕は腕を真上にのばした。

「つぎはぼくが運転しようか？」チャッキーさんが言った。

「あつ、お願いします」

ガイドブックに載っている地図を見た。アマ島は北部にあり、自分たちの泊まる宿は最南部の町にあった。港は島の西部にある。

「このちようしなら、はやく着きそうですね」僕は言った。

チャッキーさんと交代して僕は後部に座った。チャッキーさんの運転は速くもなく、遅くもなく、いたって普通だ。僕は後部に座って気がついた。運転手はさほど速度を感じない。後部は揺れるので、しっかりとつかまっている必要がある。

バイクは海岸線に沿って走り続ける。しだいにすれ違う人は少なくなり、建物も見なくなつた。右には鬱蒼^{うつそう}とした緑の密林、左は赤みを帯びてきた空とゆらめく海を背景に、輪郭線のくっきりする椰子の木が過ぎていく。後ろを振り返ると、遠近感のあるハの字の一本道が見えた。頭上を見上げると、小高い山々が視界に入る。霧^{もや}ともいえる雲が山の頂上を隠していた。僕は口を開けて、眼を大きく見開いていた。

道は海岸線を逸^それて山へ向かっていった。雲が忙しげに頭上を流

れていた。やがて雨が降りはじめ、すぐに激しくなり、大粒の雨が地面に降り注いだ。あたりは激しく音を鳴らした。チャッキーさんは痛みを避けるようにスピードを落とし、それでも進み続けた。

「島の天気は変わりやすいって聞きますが、ほんとうですね？」僕は目の前のレモンさんに話しかけた。

「まったくだわ、でも、それって山じゃないの？」レモンさんは薄目を開けて言う。

「いや、わかりません」僕は顔をしかめた。

バイクは緩やかな道を上りつづけた。雨はしだいに弱くなり、止んだ。僕はレモンさんに話しかけようと思ったが、バイクのうえでの会話が面倒だったので、話しかけるのをやめた。そのかわりに周りの景色を眺めた。

道はアスファルトから土と砂利の道に変わっていた。何度か道が分かれるところがあり、その度にバイクをとめて、三人で話してから道を決めた。ガイドブックは持っていたものの、細かい道がわからず、だれも正確な道を知らなかった。

陽はいつのまに沈み、あたりは暗くなっていた。なんだかチャッキーさんと運転をかわった。道はどんどん悪くなり、アマ島に着く気配を起こさせなかった。すれ違う人はいなくなり、冷たくなった風が濡れた衣服を冷やして、嫌な空気を感じざろうえなかった。

気がつくくと、緩やかな上り坂の道は狭くなり、大きな石がところどころに突き出る凸凹の道になっていた。くぼんだところに水がたまり、汚れが目立たなかったバイクはすっかり泥まみれになってい

た。だが、そんなことはどうでもよかった。バイクは上下に揺れながら進み、タイヤが泥にとられて滑^{すべ}ってばかりいた。

大きな石にぶつかり、車体が激しく上下した後輪が横に滑り、三人とも片足を地面につけてなんとか車体が倒れるのを支えた。

「この道であっているのかしら？」レモンさんは小さな声で言う。

「どうですかね？」僕は答えを避けるように、考えもせずに言った。

「これ以上進むのは厳しいよ」運転していたチャッキーさんが言う。

「ひどい道ね、腰が痛くてたまらないわ」レモンさんは弱々しく言った。

「こんなひどい道はじめてです」

僕は同意するように言った。辺りはすっかり真っ暗闇になっている。ふと、遭難する人間の心境を考えた。

「どうする？」「チャッキーさんがあきらめたように言う。

「どうするって？ アマ島に行くのをやめるかってこと？」「レモンさんが言った。

「そう、進むか、引き返すかってことだよ」

「どうします？」「僕もつられて言った。

「そうね、もうこんな状態だしね」

レモンさんがはつきりしないようすでこたえる。バイクのヘッドライトが石の転がる道を照らし、エンジン音が規則正しく響いていた。静かな息づかいがやけに聞こえ、時間は重々しく流れ、呼吸することに嫌気がさした。今の状況を考えて胸の詰まる思いがする。緊張を持った空気はいまにとぎれてしまい、元通りにならないような気がした。

「どうする？」チャッキーさんが静かに言った。

「どっちにしろ進むか、戻るかですよね」僕は言った。

「そうね」レモンさんは言った。

通ってきた道を考えると、僕は気が遠くなりそうになった。「また、あの凸凹道をとめるのか？」と思うと、知らない道の方がいい気がした。

「引き返しても、また、あの凸凹道ですよ。いままで走ってきた時間を考えると、進んだほうがよくないですか？」

「この道をかい？」チャッキーさんはあきれたように言う。

「はい！」

「だって、道がほとんど見えないよ？」

「はい！それでも来た道に戻るよりマシです」僕は引き返すのが嫌だった。

「そうか」チャッキーさんは考えるように言った。

「レモンちゃんはどう?」「チャッキーさんはレモンさんのほうを見る。

「わたしは、どちらでもいいわ」「レモンさんは意見を持っていないかった。

「もう、このさいです、とことん進みましょう!」「僕は間髪^{かんぱ}いれずに調子のよい声で言った。

「そう、なら、進もうか」チャッキーさんは少し間をおいて言った。

「ぼく、運転します!」

「わかった、視界が悪いから、気をつけて運転するんだよ」「チャッキーさんはそう言った。

六

道とはいえない山道を進んだ。ヘッドライトが映す道を凝視し、石を避けて運転した。バイクを止めてしまつと動きだしに苦労するので、スピードを緩めずに進んだ。後輪が滑ることもあったが、それでも夢中に進んだ。後ろに座る二人の腰の状態を気にせず、とにかく進んだ。

十分ほどすると道を上りきり、アスファルトの緩やかな道路にぶつかった。後ろから二人の喜ぶ声が聞こえ、僕は体を揺らして喜び、バイクを道路脇に停めて二人を見た。

「やった！」三人とも顔を見合わせ、同じ言葉を口にした。

「これで助かったわね！」レモンさんがうれしそうに言う。

「ああ、この道路なら余裕だ！」チャッキーさんが野太い声で言う。

「もう、あのデンジャラスな道をとおらなくすみませぬ！」僕は明るい声で言った。

「ほら、あそこに民家があるわ、ねえ、あそこでアマ島の場所と帰り道を聞きましょう」

レモンさんがそう言って歩き出し、僕はバイクを押しながら二人のあとをついていった。向かいには燈の灯りと、木造の古臭い小屋があった。

小屋に近づくと、背中が曲がった女性のうしろ姿が見える。立ったまま手を動かしているようだ。声をかけると、女性は振り返った。皺だらけの老婆だ。老婆は手の動きを止めて、微笑んでいるのかわからない顔でこちらへ近づき、なにやら話しはじめた。聞きなれない言葉で、なにを言っているかわからなかった。レモンさんは英語で話しかけるが、老婆は大きな眼で見つめたまま、聞こえていないようだった。

「この人、英語が通じないわ」レモンさんは、僕とチャッキーさんを見て言った。

レモンさんは手ぶりを交えて、老婆にもう一度話しかけた。老婆は“アマ”という言葉聞いたとたんに、しわくちゃの顔全体を歪ませ何やら話しはじめた。やはり、何を言っているかわからなかったが、指で方角を示していた。

「どつやらあちらのようだね」チャッキーさんはぼそつと言つた。

「みたいですね、どうします？ 行きますか？」僕は言った。

「帰り道はわからないしね、目的どおりアマ島へ行こうか」

「そうですね」僕はうなずいて言った。

頭を下げて立ち去ろうとすると、老婆は手招きをした。老婆は小屋の奥へのそのそと歩くと、何かを持ちだしてきた。皿の上に乾燥した大麻がこんもりと載っていた。

「マリファナだわ」レモンさんが言った。

「そうですね」

僕は表情を変えずに言った。求めていた物がこんな所で出てくるとは思っていなかったので、声をあげて喜びそうだった。だが、二人の反応を確認する必要がある。老婆は干からびてやせ細った大麻をつまみ、おもむろに前に出した。皺だらけの顔は妙にいやらしく見えた。

「なにかしら？ くれるのかしら？ それとも買えっでことかしら？」レモンさんは言った。

「どうだろうね」チャッキーさんは老婆を見つめながら言う。

「ちょっと怪しいわね、何かあるのかもしれないわよ」

「そうだね、行こうか」チャッキーさんは言った。僕は何も言わなかった。

再び頭を下げて老婆から遠ざかると、老婆はしきりに話しかけてきた。三人とも振り返り、頭を下げてからバイクへ歩いた。

「あの老婆はどうやって生活しているのでしょうか？」僕は気持ちを切り換えて言った。

「さあ、なにしてるのかしらね」

レモンさんは興味なさそうに答えた。僕は老婆のことを考えると、得体の知れない物を見たような気がして、まるで現実感がわかなかった。

チャッキーさんの運転で老婆の示した道へ進んでいると、まばゆい光を放つ建物が遠くに見えた。次第にその光は大きくなり、セブンイレブンだと気がついた。チャッキーさんは交差点の角にある店の前にバイクを停めた。

「こんなところにセブンがあるなんて……」

僕はうれしさよりも、セブンイレブンの生命力に驚いてつぶやいてしまった。悪い夢でも見ているようだ。店の前には数台のバイクが停まっており、外には褐色の島民が数人いた。

「ここまでくれば平気そうだね」チャッキーさんはほっとしたようすだった。

「ええ、よかったわ、ねえ見て、足が泥だらけ」レモンさんは足を浮かして言う。

「ほんとうだ」僕も自分の足を見て言った。

「でも、服はすっかり乾いてくれて助かったわ」レモンさんはTシャツの裾をつまんだ。

明るい店内に入ると、首都で見たセブンイレブンとほぼ同じレイアウトだ。豊富な品揃えと緑の制服を着た褐色の人間に、都内のコンビニにいたような違和感を覚え、僕は日本にいたかのような錯覚がした。普段は買わないチョコレートのアイスを買った自分が、やけにつまらなく思えた。

店の外でアイスをかじると、甘すぎるチョコレートがおいしい。

僕はむさぼるようにアイスを食べた。

「アマ島はすぐそばにあるらしいけど、すっかり暗くなってしまったわね。行ってもさほど楽しめそうもないし、帰りましょう」「レモンさんはペットボトルのお茶を手に持ち、問いかけるように言った。

「帰り道はわかるんですか？」僕は聞いた。

「お店の人が言うには、この道を真つすぐらしいわ」「レモンさんは一本の道を指す。

「ああ、よかった」僕はほっと息を吐いた。

「じゃあ、もうすこししたら出ようか」チャッキーさんが言った。

暗い道を全速力で進んだ。ところどころアスファルトの地面は陥没しており、避けきれずにその上を通ると、バイクが激しく上下に弾んだ。その度にレモンさんが、「うっ！」と醜い声を出した。僕が、「大丈夫ですか？」と聞くと、「大丈夫よ、でも、もう少しゆっくり走れないかしら」とレモンさんはしゃがれた言った。僕は大きく頷き、速度を落とすが、自分でも気がつかないうちに元の速度で走っていた。

しばらくすると丁字路にぶつかり、港に続く道だと思いだした。僕は深い息を吐き、力が抜けた感じがした。速度を落として道を左に曲がり、直線を走った。

町へ着く直前にある急な坂道の連続は、僕には何の問題でもなかった。

「わたし、知り合いの子と二十時に待ち合わせているの、このまま行ってもいいかしら？」

町の入り口に近づくと、レモンさんが後ろから声を出した。僕はバイクを道の脇わきに止めて振り返り、返事をした。

「かまいませんよ」

「ぼくもいいよ」チャッキーさんも声を出した。

「たすかるわ、ねえ、二人はこのあとどうするの？ 何もないなら一緒に食事しない？」

「いいですね！ はらが減ってしかたないですよ」僕は言った。

「チャッキーは？」レモンさんは後ろを振り向いて言った。

「ああ、いいよ」チャッキーさんはだるそうに返事をする。

「どこ行けばいいですか？」僕は早口で言った。

「セブンイレブンで待ち合わせしているの、セブンを探しましょう」

「わかりました」僕は右手首をゆっくりとひねり、バイクを走らせた。

町は昼間ののんびりとした雰囲気とは変わり、いくつもあるレス
トランが活気づいていた。陽気な旅行者が道を行き来して、屋台が
通りの脇を埋めていた。僕は人々の隙間を走り、セブンイレブンを
探した。三分も走れば見つけれられるだろうと思っていたが、なか
か町は広がった。それに、人の多さがうっとうしかった。

町の中央でセブンイレブンを発見してバイクを停めた。

「知り合いはどんな人ですか？」僕はレモンに聞いた。

「二十歳前後の男の子よ、わたしもまだ会ったことがないの」「レモ
ンさんはそっけなく言う。

「ええ？　なんでですか？」

「ミクシーのコミニティで知りあってね、フルムーンパーティーに
行くから現地で会う約束をしたのよ」

「ネット友達ですか？」

「まあ、そんなようなものね」「レモンさんはあたりを見まわした。

「すごい関係ですね」僕はあっけにとられて言った。

「あっ、あの人かしら」

レモンさんはそう言って歩き出した。その先には、耳を隠すほど
茶色い髪を伸ばした、背の高いアジア人らしき男が立っている。

「チャッキーさんも、落ちあう約束の人はいるんですか？」歩く人々を眺めているチャッキーさんに声をかけた。

「いや、いないよ」チャッキーさんが言った。

「そうですか、ぼくもいません」そう言って、僕も人々を眺めた。

レモンさんは長身の男と一緒に戻ってきた。

「ねえ、この人が知り合いの人よ、しんご君っていうの、よろしくね」レモンさんはしゃがれた声で言った。

「どうも、しんごって言います」ひげがうつすら生えた、肌の茶色い狐眼きつねめの男が手を前に出す。

「ああ、よろしく、チャッキーっていうんだ」チャッキーさんが手を握った。

「ぼくはゆうじっていうんだ、よろしくね」僕もしんご君の右手と握手した。手はうつすらと汗ばんでいた。

「さあ、さっそく食事に行きましょう！ わたし達冒険をしてきてすっかり腹ペコなのよね？」レモンさんは僕とチャッキーさんを見て、微笑ほほえみながら言った。

「そうですよ！ はやくフライドライスを食べましょう！」僕は元気よく声を出した。

僕はバイクを手で押して、三人についていった。人混みのせいでバイクを押すのが面倒くさかった。どの店に入るか迷っていると雨

が降りはじめ、見るうちに雨足は強くなっていった。電飾でかざられた開放的なレストランがちょうど目の前にあり、入り口のショーケースには島の魚介類が氷の上に並べられていた。

「ここに入らない？」レモンさんは顔をしかめて言った。

「ああ、そうしよう」チャッキーさんは言葉を待っていたようだった。

三人はレストランの入り口に近づき、僕はあたりを見まわしてから急いでバイクを停めた。小走りでレストランに入り、この雨ならバイクの汚れはきれいになると思った。

「ここは高級ですよ！ フライドライスが四十Bもします！ 殺人級だと思います！」僕はメニューを見るとすぐ、隣に座っているチャッキーさんに同意を求めるように言った。

「たしかに、宿のメニューに比べると高いね」チャッキーさんは納得したようすで言った。

「でも、これぐらいが普通じゃないのかしら？」レモンさんはメニューを見ながら言う。

「ぼくも高いと思いますよ、チャンビールが六十Bですから」「しんご君がおとなしい声で言った。

「ほんと？ ほんとうだ、セブンイレブンだともっと安いのに」「僕は不満げに言った。

「そんなこと言ってたら、何も食べられないじゃない。こついう所

に来たら気にせず使うのよ。おいしい物食べないと損じゃない」「レモンさんはうるさいものを追い払うように言う。

「そりゃそうですけど、ついつい日頃の習性で」「僕はぶつぶつと言った。

「でも、北部はもっと安かったはね、フライドライスが十五Bだったわよ」

「ええ！ それはすばらしい！」

「ここはリゾート地だからね」チャッキーさんがぼそつと言った。

それぞれが食べ物注文すると、ビンビールがすぐに運ばれてきた。ビールと同じ銘柄めいからのコップに注いでまわり、和やかに乾杯なごらした。

「最高にうまいですね！」僕は半分飲んで声を出した。

「ほんと、一日動き続けていたからね、一時はどうなるかと思ったわ」レモンさんは潑刺はっさつとした声で言う。

「ほんとだよ」チャッキーさんは眼を細め、しみじみと言った。

「なにをしていたんですか？」「しんご君はレモンさんの方を向いて聞いた。

「とういのはね……」

レモンさんが今日の出来事を大まかに話し、僕は時折言葉ときときを挿はさんでチャッキーさんの顔を何度も見つめた。チャッキーさんはその度たびにあ

いずちを打ち、静かに微笑んだ。しんご君は興味深く話に聞き入り、その間に料理は次々と運ばれ、ぶ厚い木のテーブルを飾っていた。

「大変でしたね」しんご君は感心したように言う。

「そうよ、迷子にならず、帰って来れてよかったわ」レモンさんはパイアのサラダが載った皿を中央に置いて言った。「ほら、みんなで食べましょう」

「いいんですか？ うれしいな！」僕は豚肉入りのフライドライス
を口に放り込み、フォークを使ってサラダを小皿に移した。

「ゆうじ君、あなた、普段なにを食べているの？」レモンさんは憐あわれんだように訊ねる。

「いや、そりやもう、フライドライスですよ。こっちに来て二桁は食べてます。ほんとすばらしい料理ですよ。でもやっぱり、それだけじゃ飽きちゃうので、たまにフライドヌードルも食べますよ」「僕は眼を見開いて言った。しんご君が声を出さずににやけている。

「あなたね……」レモンさんはあきれている。

「でも、トム・ヤン・クンも食べましたよ。こっちで知り合った人におごってもらったんです。二日酔いで気持ち悪くて、ほとんど残しましたけど」

僕は言った。レモンさんは何もこたえない。チャッキーさんが無言で海老の殻を剥むいている。

「ぼくだっておいしい物は食べたいですよ。でも先が長いから、節

約しないといけないんですよ」「僕はレモンさんを見て言った。

「あら、旅行の期間はどのくらいなの？」

「最低半年は考えています」「僕は答えた。

「長いわね！」「レモンさんは驚いた。

「長いですね、ぼくは一ヶ月ですよ」「しんご君は炒め物を載せたライスを、スプーンに載せたまま言った。

「ぼくも一ヶ月ちよつとだよ」「チャッキーさんが言った。二匹の海老はきれいに剥き終わっている。

「それなら今のうちから節約しないとね」「レモンさんは納得したようにうすで言った。

「そうなんですよ」「僕はそう言ってフライドライスを口に運んだ。

「わたしなんて二週間よ、それも、フルムーンパーティー翌日の朝に島を出て、首都に着いたらそのまま空港に向かって、夜中の便で帰国よ」「レモンさんは具のつまったサンドイッチを皿に置いて言った。

「それはハードですね」「しんご君は笑いながら言う。

「そうよ、だから今のうちに楽しんでおかなきゃ」

僕はその言葉を聞いて、レモンさんの強引な行動力が理解できた。

全員の食事が済むと、ビールを追加注文した。

「そういえば、二人は初めて顔を合わせたんだよね？」チャッキーさんが手をコップにかけて言う。

「そうなのよ、まったく、信じられないわ」レモンさんはしんご君を見て言った。

「そうですね」しんご君は笑いながらこたえる。

「そういえば、二人が知り合ったミクシーってなんですか？ 二チヤネルのようなものですか？」僕は思い出して訊ねた。

「そうね、ちかいところはあるけど、ちょっと違うわね」レモンさんはこたえる。

「掲示板のようなサイトなんですが、登録しないと参加できないんですよ」しんご君が言った。

「そうなのよ、登録しないと見れないのよ」レモンさんが続けて言った。

「でも、だれでも登録できるわけじゃないです。だれかしらに紹介のメールをもらわないと、そのサイトに登録できないんです」

「へえ、そんなサイトがあるんだ」僕は感心した。

「そうなの、とても便利よ！」コミュニティと言って、一つのテーマに従った掲示板のようなものがあるの」

「そうです、さまざまなコミュニティがあって、そのコミュニティに登録した人と交流できるんですよ」

「そこで、わたしとしんご君は知り合ったのよ。フルムーンパーティーのコミュニティでね」レモンさんはしんご君に眼を向けて言う。

「すごいですね！ それで今さっき顔を合わせたわけですか、いや、なんか、びっくりです。発達していますね。チャッキーさん、知っていましたか？」僕は理解できないような調子で言った。

「ああ、旅行中に会った人から聞いたことがあるよ。けど、使ったことはない」チャッキーさんは興味なさそうに言う。

「ねえ？ 二人ともミクシーやってみない？ とてもおもしろいわよ？」レモンさんが言った。

「そうですね、ちょっと気になります。こんど紹介してもらえますか？」僕は言った。

「ぼくは遠慮するよ、ネットが苦手だね」チャッキーさんが言った。

「そう、なら、あとでメールアドレスを教えてください」レモンさんは僕の顔を見て言った。

四本目のビンビールを注文すると、それぞれに酒がまわりだしていた。四人で日本での生活のことを話し、これからどうするかについて話した。他のテーブルは欧米人がほとんどで、僕のうしろのテーブルには十人前後の団体客が騒いでいた。

「そろそろいい時間ね、ねえ、ビーチへ行ってみない？」レモンさ

んは白い肌をすっかり赤く染めていた。

「そうですね、そろそろ人が集まりだすかもしれませんね」「しんご君はレモンさんを見て言う。

「えっ？ ビーチでなにかあるんですか？」「僕はびっくりして二人に訊ねた。てつきり解散するのだと思っていた。

「ビーチへ踊りにいくのよ。ビーチでは毎晩音が流れているらしいのよ、ね？」「レモンさんはしんご君に向いて言った。

「そうですね、ぼくも今日この“島”へ着いたので見てないですが」「しんご君が茶色い顔を真っ赤まっかにしたまま言う。

「レモンさん元気ですね！ じゃあ行きますか？」「僕は笑いながら言った。この際さいだからとことん動こうと思った。

「じゃあ、ビールを飲んで行きましょう！」「レモンさんはうれしそうに言った。

「ちょっと疲れたから、ぼくは遠慮しとくよ」「チャッキーさんがどんよりした野太い声で言う。

「あら、そう？ 残念ね、でも、今日はいろいろと動いたしね」「レモンさんはそっけなく、だれに言うでもなく声を出した。

会計を済ませて外に出た。雨はいつの間やに止んでいて、ところどころに水たまりが出来上がっている。チャッキーさんは少しばかり腕を上げると、振り返りもせずに宿へ向かって歩いた。しんご君が後部に乗り、人にぶつからないように気をつけながら、ビーチへと

バイクを向かわせた。酒がまわり、僕はすっかり浮かれていた。

八

僕は多種多様な人種の群れの中で踊り続けた。褐色の上半身をさらけだした若い島民の男、大きめのシャツを着た髪の毛の短い太った白人男性、ベージュの麻のパンツをはいた黒髪を結った女、ドレッドヘアの若いアジア人など、人々は誰一人同じ踊りをしていなかった。眼をつぶり手と頭だけを動かしている人間がいれば、首を上下に振り、腕を交互に突き出し、円を描くようにステップを踏む人間がいた。地面に張り付いたように、その場で万歳を続ける者がいれば、腕を下に突き出し、大きく首を振っている者もいた。

僕はビンビール片手に、大きく首を上下に振り、跳ねるように歩きまわっていた。体が上にきた時に合わせてビートが鳴り、人に何度もぶつかり、それを喜ぶように踊っていた。

ビーチには個性的なブースが並んでいた。ジャンルの違う音楽を海に向かって流し、どでかい音を放っていた。ビーチは明るく照らされていた。とこどころに松明が揺らめき、莫塵がしかれ、低いテールブルがいくつも置かれていた。莫塵の上で楽しそうに話している者がいれば、砂浜を歩く者もいたり、砂の上で塊のように抱き合っている者がいれば、追いかけてくる小さな子供達もいた。

ビーチに着いた時は人がまばらで、ブースの前で踊っている人間はわずかだった。ビーチの端から端へ歩き、ビンビールを買い、レモンさんとしんご君の踊る姿を注意力を持って観察した。

僕はトランスのパーティーにはほとんど行ったことがなかった。

ヒップホップを聴いて、クラブで太いドラムに体を合わせてきた僕には、トランスのテンポに違和感を感じた。正直、最初は自分の体をどう扱っていいかわからなかった。しかし、アルコールがそんな僕をかき消した。

フライドライスの値段には敏感に反応する僕は、ポケットの中から札を出し、二つ折りを開いてアルコールに変えていった。フライドライスが四回食べれるテキーラのショットグラスを頼んで、一息で飲み干し、ビンビールを手に持ち、人にぶつかりながら音に合わせて大きく首を振った。アルコールが全身に染みわたるように、体を動かし続けた。

音は止まることを知らなかった。低音がビーチ全体に響きわたり、音から逃れることはできなかった。ブースの前に移動して、自分の体よりも大きなスピーカーの前に立ち、全身を震わせた。心臓まで音が響いているようで、心臓が止まるのではないかと思ったが、どうでもよかった。鼓膜こまくよりも、全身が痛かった。

眼を遠くに向けると、赤い短パンをはいたしんご君が笑顔で体を揺らし、別人かと思えるほど踊り狂っていた。レモンさんは踊ることが生きることのすべてのように、全身をくねくねさせていた。音が止まったら、そのまま命も止まってしまふのではと思われた。僕はとてもおかしくなり、持っていたビンを口にあてた。ビンは一滴も僕の口を潤うるさなかった。

近くにきたと思えば、遠くにいつてしまうような音が聴こえ、規則的なドラムの音が僕を操り続けた。ビートはしだいに切り刻まれ、一点に向かい、場にいる者達を運んだ。これ以上分けられないと思われるほどにビートは細かくなり、上の音は遠く離れていった。上を流れるきらびやかな音色が動きの強弱を決めていた。体は頭とは

関係なく動き続け、エネルギーを溜めていた。一瞬、音とともに時間が止まり、景色はスローモーションに動いた。

そして爆発した。周囲にいる人間と同じように、全身を激しく動かした。顔はだらしなく笑い、人間と眼を合わせ、大きく首を振り続けた。言葉はいらす、行動だけが存在していた。音がすべてを左右した。

視界はぼやけていた。このまま一生踊り続けてもよかった。僕はそれで死んでもかまわなかった。後悔するどころか、喜んで死ぬことができた。音は鳴り続け、僕はどうでもよかった。踊っていらればよかった。それがすべてだった。

誰かが僕に声をかけた。レモンさんだ。周囲の人間の動きと合っておらず、まるで、絵画の中の一人物が動いているような違和感を感じた。顔がわからなかった。だが、しゃがれた声が僕をレモンさんだと認識させた。何を言っているかわからなかった。その隣には、湿った茶髪の狐眼の男がいた。僕に話しかけていたが、音が邪魔をして、何を言っているかわからなかった。僕は顔も近づけず、男を睨み、口を半開きにした。男の中途半端に生えたひげが気に入らなかった。

レモンさんが僕のシャツの袖をつかんでひっぱった。僕はレモンさんの顔を見てうれしくなった。白い顔は赤みがかっていて、眼の大きなかわいらしい顔が、僕の興味を惹きつけた。だが、顔は認識できなかった。僕は狐眼のしんご君に笑いながら話しかけた。しんご君は人のよさそうな笑いを浮かべた。僕はふらふらと二人の後をついていった。

音が遠くなった。僕はどこにいるのかわからなかった。辺りは暗

くひっそりとしていた。目の前にはバイクが停まっている。僕は耳が痛かった。

僕は調子よく声をあげて話しながら、笑いながらバイクを運転した。思い出したように、僕はバイクの運転に集中した。レモンさんが後ろから声を出して、僕を誘導した。僕はバイクの運転だけをした。

しんご君を何処かでおろし、宿に着いてバイクのエンジンを切った。夜中の静けさが僕を包んだ。僕はなんかうれしくなった。レモンさんに笑顔で声をかけ、自分の部屋の前に足を運んだ。乱暴にポケットに手をつっこみ、揺れる体を抑え、鍵を開けた。

壁のスイッチに手をかけて灯りを点けた。部屋の空気は重苦しく、妙に明るかった。鍵をベッドに放り投げ、ベッドに倒れた。部屋はやけに静かで、耳鳴りが痛くてしよがなかった。

九

目覚めは快調だ。酒臭さは残っていたが、けだるさはなく、不思議なくらい体は軽かった。昨日の夜の記憶はうる覚えだったが、断片的に覚えていた。腕時計を見るとまだ午前中だ。

外に出ると鮮烈な色が眼にとびこんできた。宿の食堂と借りている部屋の間にある中庭は、柔らかな芝が地面を埋めつくし、眩しい陽射しを浴びて存在感をあらわしていた。背の高い椰子の木が数本そそり立ち、ハイビスカスの真っ赤な花が眼を惹いた。予定は何もなく、僕は幸福な気分だった。

レストランに近づくと、働いている若い女の子と眼が合い、覚えただけの言葉であいさつをした。女の子は微笑んであいさつを返す。ふくよかなおばさんが調理場から出てきたので、同じようにあいさつした。おばさんは眼を開かせて、女の子と同じように微笑みながらこたえる。僕はビーチへ指さした。おばさんは小さく首をひねった。

僕はビーチへ出た。昨日の昼間見た時よりも海面が近ずいて、白く濁っていた。波はわずかに高くなっていたが、じゅうぶん穏やかだ。遠くに見える島は、同じぐらいの大きさの雲に覆われ、かすんで見えた。

パーティーのあるビーチに比べると、随分と狭いビーチを歩いた。人がぼつぼつといる。バットぐらいの長さの木の棒を拾うと、温く湿っていた。僕は棒をひきずり、砂に跡をつけて歩いた。海には大

きな中年の白人男性が浮いていた。波に揺られている男性が僕に気がつくとおもむろに腕をあげた。僕は木の棒をあげた。

僕は歩いた。海水パンツ姿の小さな男の子が、向かいからジグザグに走ってくる。僕はその男の子を見た。男の子は大きな眼で僕を見ながら、偉そうに大きな声であいさつした。僕も同じようにあいさつした。男の子は裸足で砂をけり、僕のわきを走りすぎていく。僕は後ろを振り返らず、ひきずっていた棒を、片手で振り回しながら歩き続けた。

僕は幸福だった。すれ違うすべての人とあいさつを交わした。それは人間としてあたりまえの行為だった。僕はその行為がうれしかった。

一時間程して宿に戻ると、二人は起きていなかった。僕はシャワーを浴びて、そのまま洗濯をしたあと、おなががすいていたので、チャッキーさんの部屋のドアを叩いた。

「チャッキーさん、もう昼前ですよ！」僕はドアの奥を意識して声を出すと、チャッキーさんの呻き声うめがかえってきた。

僕はレモンさんのドアの前へ移動して、一瞬とまどってからドアを叩いた。

レストランで待っていると、細い眼をよりいっそう細くしたチャッキーさん来た。チャッキーさんは水色のTシャツを着ていて、別人のように感じられた。

「おはようございます。今日は天気がいいですよ」僕は微笑みながら言った。

「おはよう、起きるの早いね」チャッキーさんがつぶれた顔で言う。

「眠そうですね？」

「いや、まだ眼が開かなくて」チャッキーさんは目の前の席に腰をおろした。

「何か注文はしたの？」

「まだです、みんなが来てからにしようと思ひまして」

「そうなの？ 頼めばよかったのに、けっこう待ったでしょう？」
チャッキーさんはメニューを手に取って言う。

「いえ、ぼーっと海を見ていたので、あっという間でしたよ」僕は何事もなかったように言った。

「そう、ならいいけど」チャッキーさんは顔を一瞬上げて言った。

「そういえば、チャッキーさんはあの後何をしていたんですか？」
僕はふと聞いてみた。

「昨日？ ああ、すぐに眠ったよ。いや、もう疲れてさ」

「たしかに、“島”に着いて動きっぱなしでしたよね、旅行に来て、あんな動いた日は初めてですよ」

「ほんとだよ」チャッキーさんは静かに言った。

「レモンさんタフですよな？ あのと、夜中まで踊っていたんですよ」

「そうなの？ ほんと元気だね！」チャッキーさんは眼を大きくして言う。

「もう無理やりです。でも、楽しかったですよ、トランスがあんなにいいものだと知りませんでした、あつ、レモンさんだ」僕は淡黄色のキャミソールを着たレモンさんを見つけ、言葉を切った。

「おはよう」チャッキーさんが後ろを振り返って言った。

「おはよう」みけん「眉間に皺しわを寄せたレモンさんが、しゃがれた声をよりいっそう枯からし言う。

「おはようございます」僕は微笑みながら言った。

「あなた早いわね、あんなに酔っ払っていたのに」レモンさんはチャッキーさんの隣に座る。

「そうなんですよ、不思議なことに元気なんですよ」僕は言った。

「ねえ、しんご君が盗難にあつたのよ、知ってる？」レモンさんは困ったようすで言った。

「えっ！」僕はありがちな声を出した。

「ほんと？」チャッキーさんも同様に声を出す。

「そうらしいのよ、昨晚さあ、しんご君がわたしの部屋に来たのよ」

「昨晚つて、帰ったあとですか？」僕は聞いた。

「あのあとよ、わたしは寝ていたんだけど、ドアをノックする音と彼の声がしたのよ。すると、パスポートが入っていた財布がないって言うのよ」

「そりゃ大変だ！ どうしてですか？」

「わたしも詳しくは知らないけど、どうやらバックパックに入れておいたらしく、部屋に戻ると、かけていた南京錠が壊されて、財布がなくなっていたらしいのよ」

「部屋の鍵はかけていたの？」チャッキーさんが聞く。

「かけたそうよ。でも、戻ってきた時は開いていたらしいわ」

「じゃあ、しんご君はどうしているんですか？」

「わたしの部屋に来たあと、宿へ戻ったわ。話は聞いたけど、もう、夜が明けはじめていたのよ。どうすることもできなくて、明日みんなで考えましようってことになったのよ」レモンさんがひっくり返ったような眼をして言う。

「運が悪いね、しかし、本当に盗難はあるんだね」チャッキーさんは驚いたようすで言った。

「ほんとですよ」

僕はそう言ったあと、自分の行動を思い起こした。そして、自分

の考えの甘さを思い知らされた。盗難はどうも他人事のように、まるで現実味がなかった。自分には関連のない出来事で、心のどこかで盗まれる人を馬鹿にしていた。だが、知り合いが盗難にあったのを聞き、はつきりと起こりえる現実だと認識して、背筋がぞっとした。

先ほどまでの軽快な気分は消えてしまい、場は重苦しい沈黙で包まれた。

「でも、考えたってしかたがないわ。しんご君が来ないと詳しくわからないし。ねえ、二人は食事を注文したの？」レモンさんが話題を変えるように言った。

「いや、まだだけど」チャッキーさんがこたえた。

「なら、頼みましょう、わたし、おなかすいたわ」

十

食事が食べ終わる頃、しんご君が狐眼を細めた醜い顔をしてやって来た。

「お財布はあった？」レモンさんは僕の隣に座ったしんご君に声をかけた。

「いえ、やっぱりありませんでした」しんご君は顔をびくりとも動かさずにこたえる。

「話は聞いたよ、大変な目にあつたね」チャッキーさんが憐れむように言う。

「そうなんです、まいつちやいますよ」

しんご君はあざけるように笑った。僕は何を言っているかわからなかった。

「どれぐらい入っていたの？」チャッキーさんが聞いた。

「約十万円とパスポート、ほかにカード類が入ってました」

「うわ、きついね」チャッキーさんは顔をしかめる。

「でも、半分はトラベラーズチェックだったのが救いです」

「換え^かといてよかったわね」レモンさんが言う。

「でもパスポートがないと換金できないでしょ？ 今は持ちあわせはあるの？」チャッキーさんが訊ねる。

「はい、五万円ぐらいは現金で持ってます。金を三ヶ所に分けてしまっていたので、財布以外は無事でした」しんご君は言う。

「盗んだ人はそこまで気がつかなかったのね、よかったわ」レモンさんがしゃがれた声で言う。

「三ヶ所に分けていたんだ？ すごいね」僕は言った。

「それなら何日かは生活できるね。でも、パスポートがないんじゃないかな、それにカード類もとめないといけないだろう？」

「そうなんです、やるが多すぎて混乱してましたよ、でも、寝たらだいたいおちつきました」

しんご君はかすかに笑いながら言った。雨がぼつぽつと降りはじめ、雨音がひたひたと聞こえた。

「じゃあ、今はどこに泊まっているの？」レモンさんが訊ねた。

「昨日と同じ宿にいますが、あとで宿は移ります。あんな宿にはもう、泊まりたくありません。それに、宿のオーナーに聞いても知らないと言っんです。おかしいじゃないですか？ 部屋のドアが開いていたんですよ？ それなのにしらばっくれて。一番あやしいのは宿の人間ですよ。ぼくが『部屋の防犯が悪い』と言っても、相手にしてくれないんです。それでもしつこく訊ねていたら、しまいには、

『警察へ行けばいいじゃないか』と笑いながら言っんです。もう、本当に腹がたちましたよ!」

穏やかな人、という印象のしんご君が憎々(にくにく)しげに声を出したので、僕は意外な物を見たような気がしてびっくりした。

「たしかに宿の人間が一番疑わしい」チャッキーさんが同意するよ
うに言う。

「そんな宿に泊まっていたのでは危ないわね。ねえ、しんご君、わたし達が泊まっている宿へきなさいよ」レモンさんが言う。

「僕もそうしようと思っていたんですよ、どうです、部屋は空いて
そうですか?」

「あれだけ部屋があるんだから、一つぐらいは空いてそうですよね」
僕は言った。

「そうよね、わたし、ちょっと聞いてくるわ」レモンさんは立ち上
がり、調理場へ歩いた。

「今の宿はどうやって決めたの? ガイドブックを見て決めたの?」
チャッキーさんがしんご君に訊ねた。

「この町に着いた時、話しかけてきた客引きについて行っただんです。
値段が安く、部屋も思った以上によかったんですよ。レセプション
のある小屋から離れていて、森の中にバンガローがあるんですが、
今考えると、周囲はひと気がなくて危ない場所です」

しんご君は声を大きく言った。

「やっぱり宿の人間があやしいね」

チャッキーさんは確信したように言う。僕は麦わら帽子をかぶった、眼のりりしい男を思い出した。

「部屋は満杯らしいわ」レモンさんがこちらへ歩きながら言う。

「そうですね」しんご君はとても残念そうに言った。

「でも、このあたりは似たつくりの宿が多いから大丈夫よ。近くの宿を探しましょう」

「チェックアウトは済ませたの？」チャッキーさんが言った。

「いや、まだです、起きてすぐにこちらへ来たものですから」

「それなら、僕がしんご君を乗せて、バイクで荷物をとりに行きませよ」僕は役目を見つけ、張り切って言った。

「それはいいわね、お願いしてもいいかしら？」レモンさんはひさしぶりに僕を見て言った。

「でも、悪いですよ」しんご君が申し訳なさそうに言う。

「いいよ、どうせやることないし、せつかくバイクがあるんだから使わないとね」僕は**大様な態度**で言った。

「いいんですか？ たすかります」

「じゃあ、ぼくとレモンちゃんは、二人が戻るまでに宿を探しておくよ」チャッキーさんが間髪いれずに言う。

「ええ、そうしましょう。じゃあ、さっそく行動を開始しましょう！」レモンさんはしゃがれた声を大きくあげて言った。

ところが、降りはじめた雨は、その瞬間を待っていたかのように雨足を強めた。大粒の雨が地面を打ち付けて、勢いよく跳ねる。雨粒は壁のないレストランに吹き込み、茶色の床を濃く染めていった。三人は席を移動した。僕は雨に近づいてから、三人のほうへ顔を向けて首を振った。

僕たち四人は雨を見ていたが、口数は次第に減っていった。轟音を立てる雨音は、話すことさえも許さないようだった。

レモンさんがガイドブックを読み始めた。チャッキーさんは横になり、寝息をたてはじめた。しんご君はばつが悪いようにそわそわし、なにやら考え事をしているようすだった。

僕は膝を抱えて海を眺めた。強い横風が海面を乱し、雨粒が海面をざわつかせていた。空は薄暗く、灰色に覆われている。遠くの島はもう見えなかった。

一時間程で雨は止んだ。レモンさんは腕を組んでテーブルに顔を埋め、チャッキーさんはいびきをかいている。しんご君は落ち着きがなく、顔をしかめたまま食堂内を歩いていた。

僕はチャッキーさんの腕を揺らし、レモンさんの肩を揺すった。眼が半開きの二人に食堂で待ち合わせる約束をしてから、しんご君と食堂を出た。

五分程でしんご君の泊まっている宿に着いた。道路のわきにバイクを停めて森に入ると、暗く鬱蒼とした中に、茶色のバンガローがぽつんと建っていた。

「あそこですよ」しんご君が言った。

「昨日の夜、よく帰ってこれたね」僕は言った。

外観から受けた印象とは違い、部屋は明るくてきれいだった。ダブルのベッドが部屋の四分の一を占め、別室にシャワーとトイレがついていた。天井には腕を広げたぐらいの大きさのファンがついていて、ゆっくりと回っていた。

「いい部屋だね、これでいくらなの？」僕は入り口に立ったまま訊ねた。

「二百Bですよ、安くないですか？」しんご君がベッドに近づいて

言う。

「たしかに安いね」

「あつ、遠慮なく休んでください、すぐに荷物を整理しますから。お菓子がありますが、食べます?」

「ありがとう」僕はしんご君から見たことのないスナック菓子を受け取り、入り口近くにあるイスに座った。菓子をむしゃむしゃと食べながら、僕はしんご君が動きまわる部屋をきよきよと眺めた。

しんご君は散乱していた衣服をしまい込み、素早く荷物をまとめた。部屋の戸締まりを確認してから部屋を出た。僕はスナック菓子を食べながら歩いた。

バイクを停めている道路に戻り、目の前にある建物に近寄ると、しんご君が外のイスに腰掛けている男に声をかけた。背の低い、顔の長い中年の男は立ちあがり、こちらに近づく。

「あいつが宿のオーナーですよ」

しんご君は僕の顔を見てから前に進み、男に英語で話しかけ、部屋の鍵を渡した。僕は二人に近づくと、英語でなにやら話をしていった。

しんご君は眼をすどくさせて、声を張りあげて話した。男は馬鹿にしたような笑顔を浮かべて話した。男がなにか話すと、しんご君は声に力をこめて話した。男が何か説明するように話すと、言い終わらないうちに、しんご君が長々と話をした。それが何回か繰り返されると、男の顔がみるみる真面目まじめになってきた。

身振り手振りを使い、臆おくすることなく、感情を露あらわにしんご君が話している、男もいつの間にしんご君になつていた。男が勘弁かんべんをしてくれとも言つように、話す言葉に合わせて肘を曲げた腕を振ると、建物へ足早に歩き出した。

「どうしたの？」僕は表情を変えずに言った。

「あの男、盗んだことを知らないとぬかすくせに、チエックアウト時間を過ぎた分の宿代を請求してくるんです。もう、ほんと、頭にきますよ。ぼくが『払わない』と言うと、『チエックインの時に渡したデポジット代で勘弁してやる』と言い出すんですよ。そんなのおかしいじゃないですか？ だから、『おまえを警察に連れて行く』と言つてやつたんですよ、そうしたら、あいつ、急に態度を変えて、『わたしは知らない。わかった、宿代はいらない、金も返すからここから立ち去つてくれ！』と言うんですよ。あやしくないですか？ 警察と聞いて態度を変えるなんて、あやしくないですか？ やっぱりあいつが盗とつたんですよ、ぼくはあいつと警察へ行きますよ」

しんご君は興奮したまま、早口でしゃべった。僕は同意するような言葉を言った。だが、どうも現実味がなかった。

男が札を手を持ったまま戻ると、しんご君を睨にらんだまま声を出して、手を前に出した。しんご君は札をぶつきらぼうに取つて、札の枚数を数える。すると狐眼をさらに鋭くさせて、男の腕をつかんだ。男は大声をあげて手を振り払い、猛烈に言葉を吐き出す。しんご君はそれを聞かず、男の言うことをかき消すように大声で話し、再び男の腕をつかんだ。

僕は面倒くさいことになつたと思つた。「しんご君はかわいいそう

だが、この男が盗っていたとしても、それが何になるだろう？ この男が盗んだのなら、証拠をさらけだすようなへまはしない。他の荷物はいつさい盗らず、財布だけを盗んだ。目的がはっきりしている、そんな犯人がボロをだすだろうか？ たとえこの男が本当の犯人だとしても、財布が戻ってこないという意味がない。なにしろ、ここは日本じゃない、海外だ」そう思っていた。レストランでみんなの会話を聞いてから、僕は財布は戻ってこないと信じていた。

僕は表情を変えず、二人をじつと眺めていた。背の高いしんご君が、小柄な男を無理やりひっぱって歩かせた。男はあきらめたように顔を曇らせて口を閉じていた。しんご君が威圧的に話すと、男は小さい声でこたえた。僕はそれを見て、小柄な男がかわいそうに思えてきた。

「こいつと警察のところまで行きますが、いいですか？」しんご君は興奮を抑えたように言った。

「いいけど、場所は知っているの？」僕は静かに言った。

「はい、こいつに聞きましたから」そう言って、均整のとれていない二人の体は前へ歩いた。

すこしすると、小高い丘の上へ続く道を歩いた。道の周辺には建物がなく、生い茂った雑草が広がっていた。僕はこんなところに警察署があるのかと不思議に思った。二人は僕の目の前を歩調の合わない足取りで進んでいく。

丘の上には小さなコンクリートの建物があった。味気のない一階建ての建物は、人が住んでいるようすが感じられなかった。

「ここなの？」

僕はしんご君に訊ねて、男の顔を見た。男は変わらず沈んだ顔をしていた。しんご君は男を見て、大きな声を出した。男は静かにうなずいた。男が奴隷のように見えた。

「どつちやらそのようです」

しんご君はそう言って、ラクダ色の木のドアに近づき、ノックした。空は晴れ、忙しく動く雲の間から太陽がのぞき、緑は露を反射させて輝いていた。遠くからバイクのエンジン音が聞こえた。

「いないのかな？」僕は言った。

扉が開き、こげ茶色の肌をした大柄の男が出てきた。外の光に慣れてないかのように、顔をしかめて三人を見まわした。

しんご君が口を開き、つかんでいた腕をひっぱり、男を横に並べた。男は困ってしまったような顔をして、大柄の男に目配せした。大柄の男は関心なさそうにしんご君の話聞いていた。僕は三人からわずかに離れた位置で黙っていた。

しんご君がたどたどしい英語で話し続け、時折大柄の男が言葉をはさむ。そのまましんご君が話していると、小柄な男が口をはさんだ。大柄の男が小柄な男に話しかけると、小柄な男は体を使って話す。すると、しんご君は小柄な男をのぞき込むように見て、声を荒げた。小柄な男は真剣な顔をして、立ち向かうようにしんご君に話す。それを見て、大柄の男がうるさそうに声をはさんで話し出さず。二人は大柄の男を向いた。

大柄の男が話している最中にしんご君は話し始め、小柄な男を見ては、話し続けた。小柄の男が大きな声でさえぎるように話し、大柄の男に話しかけた。大柄の男は聞いているが、聞いていないようにも見えた。

しだいに、しんご君と小柄な男の会話が目立つようになり、話し声は速く、大きくなり、会話はふくらんでいた。しんご君はたまに僕のほうを見て話し、そのたびに僕はうなずいた。冷やかな眼をしていた大柄の男は、少しずつ声に感情をふくみはじめ、眉間の皺しわはこれ以上ないぐらいに肉厚があつた。

しんご君と小柄な男はまわりが見えていないかのように、二人の世界に入っていると、大柄の男は大声で叫んだ。体格に似合わない素早い動きで手振りを加えて、早口でまくしたてる。小柄な男は黙つたが、しんご君はそれに反応するように狐眼を開き、食い下がるように話し始めた。大柄の男は先ほどまでのだるそうな態度のかけらもなく、盛さかんに声を出している。しんご君も負けじと声を出している。

二人だけの会話が続いた。小柄な男は疲れた顔して黙っていた。僕も黙っていた。二人の上方を見ると、山が見えた。空は澄すみきつて、山は陽の光を浴びてつやかな緑を発色し、その頭には白い霧もやが流れ、真つ白な大きな雲がその背景を占めていた。数種類のバイクのエンジン音が近づいては、去っていった。

僕は何度も笑い出しそうになった。しんご君はとても滑稽こっけいに見えた。二人の会話している姿はともかわいらしく映った。

やがて、しんご君が僕を見て、憎々(にくにく)しげに言った。

「行きましょう！ もう、これ以上いても無駄です！」

「どうしたの？」僕は落ち着いたようすで言った。やっとしんご君が気がついたと思った。

「もう、話になりません！ 男はしらをきるし、この警察は男を調べようとしない。しまいには本当に盗まれたのかと疑ってくるじゃないですか！ 最低ですよこの“島”の人間は」しんご君は疲れた顔をして言う。

「そっか」

僕はそう言った。しんご君の背後を見ると、大柄な男は不愉快そうな顔をしていた。小柄な男はあきれたような顔をしていた。僕は思わず口元が緩み、首を傾げた。

宿の前の小道でレモンさんとチャッキーさんに会った。遅れた事情を簡単に説明したあと、自分達が泊まっている宿の、小道をはさんだ向かいの宿は空いていると教えてくれた。

バイクを停めて、四人で向かいのバンガローへ歩いた。

「値段のわりに好い部屋ですね」

しんご君が部屋の中を見まわしながら言った。盗難のあった部屋よりも狭いが、トイレとシャワーがついていて、大型のファンもついていた。

「でしょ？ わたし達がんばったのよ、ねえ、チャッキー？」レモンさんは肌の白い、愛らしい顔で言った。

「そうなんだ、もう、足が棒のようだよ」チャッキーさんが野太い笑い声をあげて言う。

「うそですよ！ 宿の目の前じゃないですか！ 百メートルぐらいしか離れていないじゃないですか！」僕は顔をにやつかせ、元気よく言った。

「あら、なにを言うの、わたし達ちゃんと探したのよ。空いている宿がたまたま此処こゝだっただけよ、ねえチャッキー」レモンさんはしやがれた声を聞伸びさせて言う。

「そうだよ、数軒見てまわったけど、たまたま此処が一番好かったんだ」チャッキーさんは言った。

「そうですか、ぼくはてつきり……」

「ありがとうございます、文句なしの部屋ですよ」「しんご君はうれしそうに言った。

「そう？　ならよかったわ」「レモンさんもうれしそうに言う。

「しんご君はこのあとどうするんだい？」「チャッキーさんが訊ねる。

「いろいろやることがあるので、まずは日本大使館に連絡しようと思います。そのあと、ネットカフェに行つてから、“島”の警察署へ行こうと思います。交番は役に立たなかつたので」

「それなら、ぼくが運転して連れて行くよ」「僕は言った。

「いや、大丈夫です。せっかくですが、もう一人で行動できる範囲のことですから、みなさんにこれ以上迷惑かけられません」「しんご君は申し訳なさそうに眼を細める。

「そつか、それならいいんだけど、でも、警察署はここから離れてるんじゃない？」「僕は言った。

「はい、でも大丈夫です。なんとかして行きますから、みなさんは気にせず行動してください」

「でも、せっかくバイクがあるんだから、レモンさん、このバイク、

しんご君が使ってもいいですよね？」僕はレモンさんを向いて、あたりまえのように言った。

「もちろんよ」「レモンさんは言った。」

「チャッキーさんは？」僕はチャッキーさんの顔を見た。

「ぼくもいいと思うよ」「チャッキーさんはやさしい口調で言った。

「なら、バイクを使って移動しなよ」「

「えっ？ いいんですか？ でも」「しんご君はさらに申し訳なさそうに顔をしかめる。」

「いいのよ、困った時はおたがいさまじゃない」「レモンさんが言う。

「そうですか、すごいたすかります。本当にありがとうございますしんご君は頭を深く下げた。」

「さて、わたし達はどうしましょうか？」「レモンさんは明るい調子で言った。」

「ぼく、水着を持ってないんですよ。水着を買いに行きたいです僕は早く海に入りたかった。」

「じゃあ、買い物にでも行きましょう！」「

「そうしましょう！」「

「チャッキーは？」「

「ついて行くよ」チャッキーさんは言った。

「しんご君、わたし達買い物に行くから。早めに戻ってきたら雑貨屋が並ぶ通りを探してちょうだい。もし、見つからないようだったら、わたし達の宿に来てね」

「わかりました、ありがとうございます」しんご君は言った。

「はい、これ鍵だから、気をつけてね」僕はバイクの鍵を渡した。

「じゃあ、またあとでね！」

洋服屋や雑貨屋を一時間ほど見てまわり、僕は紺の海水パンツを買った。レモンさんは華やかな模様の布生地きじを買ひ、チャッキーさんはビール会社のロゴマークがプリントされたTシャツを買っていた。

買い物を終えて、開いたばかりの屋台に寄ってから、宿へ向かって歩いていった。屋台はぞくぞくと開店の準備をはじめていて、道を歩く人の数も少しずつ増えていた。太陽が傾きはじめ、影はゆっくり伸びていた。

「思うんですが、日本にもこういった、気軽にメシを買える屋台があればいいと思います」僕は鶏肉の刺さった串焼きを手を持って言った。

「あら、あるじゃない、焼きそばやお好み焼きの屋台が」レモンさんは言う。

「あれじゃダメなんですよ。あれはたまにで、祭りなどのイベントの時にしか出現しないじゃないですか」僕はそう言い、串に刺さっている肉を歯で噛み、串を横にひいた。

「でも、この“島”だってパーティがあるからじゃないの？」

「まあ、たしかにそうですよ、でも、首都の屋台の数を見ましたか？ ぼくは一度、首都で迷子になって三時間ぐらい歩いたんですよ。

その時、得たいの知れない恐怖というか、人間の生命力を感じましたよ。どこ歩いても人ばかりだし、屋台はそこらじゅうにあるんですよ？ 余計なことかもしれませんが、この人達はいったいどうやって暮らしているんだろう？ 暮らしていけるのか？ と心配になりました。だって、いたるところ、まるで自動販売機の代わりのように存在しているじゃないですか、ぼくはこの人達はどうかやって暮らしているのか不思議でしょうがなかったですよ」僕は口の中の物を嚙んだ。

「そういわれると、どこ行っても屋台があつて、活気があるわよね。でも、わたしはあまり屋台の料理は食べなかつたわ」レモンさんはしみじみと言う。

「えっ？ なんですですか？」僕は口を動かしながら言った。

「こんにちわ」日本人女性の二人組とすれ違い、レモンさんはあいさつした。

「だって、汚らしいじゃない」レモンさんは僕を振り返って言う。

「たしかに衛生面は問題ありそうだよね」チャッキーさんが言った。

「でも、安くておいしいじゃないですか？ 剥いてカットされた果物がありますし、揚げた春巻きのようなものもあります、串焼きもあります。いろんな種類の屋台があつて、手軽に食い歩きができるじゃないですか。しまいには虫まで売っていて、興味本位でタガメを買いましたよ」

「えっ？ あの、タガメを食べたの？」チャッキーさんは顔をひきつけて言う。

「もちろん食べました、食べた瞬間は地獄でしたよ」僕は顔をふるわせて言った。

「タガメってなに？」レモンさんは興味深そうに聞く。

「これぐらいの虫だよ、めったに見ないけど、水の中にいるんだ」チャッキーさんは親指と人差し指を開いて説明する。

「そうですね、ときたまペットショップに高値で売られている虫です」僕は得意げに言った。

「大きいじゃない！ 気持ち悪い！」レモンさんはあからさまに顔をしかめて言う。

「そうですね！ 本当に気持ち悪いんですよ、もう、かたかくてかたくて、歯肉に節ふしがささるんですよ、そのくせ、中身はやわらかく、臭みがあり、羽はなかなか噛みきれず……」僕は手をあげて言った。

「もうやめてよ、気持ち悪い」

「そうですね、さらに気持ち悪いことに、タガメは、たしか、ゴキブリの仲間なんですよ、まったく、ミスカマキリだったらいいんですが、けど、ミスカマキリじゃ肉がないですね」

僕はいやらしい口調で言った。レモンさんはなにも言わなかった。

「タガメってゴキブリなの？ たしかカメムシの仲間だったはずだよ」チャッキーさんが言う。

「いや、たしかです、人から聞いた話なのではっきりとはわかりません」僕は言った。

「馬鹿ね、あつ、ちよつと、シェイク屋さんじゃない、寄らない？」
レモンさんは道の端の小さな建物に近づいた。

「シェイク屋ですか、飲んだことないですがおいしいんですか？」
僕はレモンさんに聞いた。

「飲んだことないの？ ほら、首都にバックパッカーが集まる通りがあるじゃない、その通りのはずれにシェイク屋の屋台があるのよ」

「ああ、ぼくもそこで飲んだことあるよ、青いパラソルのお店だよ
ね？」チャッキーさんは言う。

「そつよ、その屋台よ、おいしくない？」

「とてもおいしかったよ、それに安かった」

「屋台、使っているじゃないですか」僕は口をはさんだ。

「あら、わたし使っていないなんて言っていないわよ、ただ、汚い
と言ったのよ、でも、そんなことどうでもいいじゃない、ねえ、飲
まない？」レモンさんが調子よく言う。

「いいですよ！」僕は元気よく言った。

四畳ぐらいの小さな店には、長い髪を一つに結った褐色の若い女
性がいた。カウンター越しに眼が合うと、歯並びのよい白い歯が見
えた。

「いろいろ種類があるんですね、英語表記でよくわかりませんが」
僕は言った。

「わたしスイカが好きなんですけど、書いてないわ」レモンさんは言
った。

「ぼくはドラゴンフルーツにするよ」チャッキーさんが言った。

「知ってますよ、悪魔の卵みたいな、濃いピンク色の、グロテスク
な果物ですよ」僕は言った。

「そうだよ、あれが好きなんだよね」

「あれ、おいしいんですか？」僕は疑わしそうな顔をして訊ねた。

「ああ、おいしいよ。果肉は薄い灰色で、黒胡麻のような種がつま
っているんだ」チャッキーさんは微笑みながら言った。

「そうなんですか、あとで一口ください」

「わたしはパイヤにするわ」レモンさんは言った。

「じゃあ、ぼくはなにしよう……」

僕はメニューを見ながら考えていると、チャッキーさんの注文を
受けた女性が、ピンク色の果物をナイフで二つに割った。シェイカ
ーをバケツの水でさっと洗い、キウイを巨大化させたような大きさ
の果物の皮を剥くと、果肉を細かく切り、シェイカーの中に入れた。
氷と調味料を手際よく入れて、シェイカーの蓋ふたを上から押さえると、

シェイカーが音を鳴らして動きだした。僕は何を注文するか考えずに、一連の流れを見ていた。流れるような動きだった。

「僕はマンゴーとココナッツミルクにします」僕は好きだったマンゴーのカキ氷を思い出して言った。

「あら、おいしそうな組み合わせじゃない」レモンさんはやけた顔で言った。

十四

宿に戻ってもやる事がなかった。バイクはしんご君が乗っていたので、移動手段を失った僕たち三人は、宿の食堂でしんご君の帰りを持っていった。

「おそいわね」レモンさんはガイドブックを読んでいた顔をあげて言った。

「そうですね、もう二時間以上経ってますもんね」僕は膝を抱えて座り、海を眺めていたので、後ろを振り向いて言った。濡れた水着はにわかにかいていた。

「まあ、やる事が面倒だし、言葉が違うからね、たぶん手こずってるんじゃない」チャッキーさんがレモンさんからガイドブックを受け取りながら言った。

「ついていないわよね、しんご君」レモンさんは両腕をテーブルの上に組んだ。

「運が悪いですよ、部屋の鍵をかけて、バックパックには南京錠をかけていたのに盗られたなんて、盗られるときは何をしても盗られるんですかね？」僕は言った。

「そうかもね、でも、よっぽどじゃない限り、用心すれば防げるんじゃない」チャッキーさんは言う。

「肝心なのは用心ですね。ぼく、しんご君を見ていい経験になりました。はつきり言って、考えが甘かったですから」

「しんご君には悪いけど、自分じゃなくてよかったわ。考えただけで面倒くさくなるもの」レモンさんは人形のような顔で言う。

「そういえば、トラベラーズチェックってどこでつくれるんですか？」僕はチャッキーさんに聞いた。

「ぼくは日本の銀行でつくったけど、海外ではどうなんだろう？知らないな。なんで？ つくるの？」チャッキーさんはガイドブックのページを開いて言った。

「はい、持ち合わせはすべて現金なので、急に不安になって」

「半年分の旅行費を？」レモンさんはしゃがれた声で言った。

「そうです」僕は答えた。

「それならつくったほうがいいよ」チャッキーさんはページをめくって言った。

「ねえ、ガイドブックに載っているんじゃない？」レモンさんは言う。

「そう、いま探しているところだよ」

レモンさんはナイロンの小さいカバンから日記帳を取り出し、黙々（もくもく）と書き始めた。チャッキーさんは一人でぶつぶつ言いながら、ガイドブックをめくり、僕はそれを無言で見つめていた。

「どうですか？　ありそうですか？」僕は待ちくたびれて言った。

「うーん、ないね、うーん」チャッキーさんは本から顔をそらさずに答える。

「そうですか」僕はため息をついた。

陽の光はかすかに赤くなり、風に冷たさを感じるようになった。僕は床の砂を手ではらい、仰向けあおむになった。水着はだいぶ乾いていた。

「ひまですね」

僕は二人に聞こえるように言った。誰も返事をしなかった。二つ離れた席では、端正たんせいな顔した白人の男が本を読んでいた。

「これだけ涼しくてのんびりしていると、眠くなりますね」僕は再び言った。

「それなら、もう一度海へ入ってくれば？　目が覚めるんじゃない？」レモンさんはどうでもよさそうに言う。

「面倒くさいのでやめときます。温かくてきれいな海ですが、波は低いし、シュノーケルがないのですぐに飽きてしまいます」僕は一瞬、シュノーケルを買いに行こうと思ったが、体はまるで反応しなかった。

そのまま眼をつぶっていると眠くなってきた。

「どうもないな、ネットで調べたほうがいいね」チャッキーさんは残念そうに言った。

「ありがとうございます。ひまな時にでも調べてみます」僕はチャッキーさんの声にはっとなり、力のない声で答えた。

「それにしても、しんご君遅いわね、なにやっているのかしら？」レモンさんが不機嫌そうに言った。

「どうだろうね？ そろそろ戻ってきてもいいころだと思うけど」チャッキーさんは言う。

「交番のおっさんはほとんど相手にしてくれなかったから、警察署でも同じ目にあってるんですかね？」僕は眼をつぶりながら言った。

「移動手段がなくて困るわ。わたし達が借りたバイクだからね、しんご君には申し訳ないけど、残り少ない旅行の時間をこんなことで削られるのはイヤだわ」レモンさんはしゃがれた声で言った。

「そうか、レモンちゃんは三日後の朝に“島”を出るんだもんね」チャッキーさんは言った。

「ほんと、はやく戻ってこないかしら」僕はその言葉に何の関心もなく、ただ聞いていた。

「だめだ、眠いです。ちょっと部屋に戻って仮眠してきます。しんご君が戻ってきたら起こしてください」僕はそう言って、ゆっくりと立ち上がった。

「わかったよ」チャッキーさんは言った。

十五

眼を覚ますと朝だった。ベッドの上は砂でざらつき、一瞬、自分の居場所がわからず、自分は何をしていたのか考えた。昨日の夕方から眠っていたことに気がつく、バイトを寝過ごしたような気がした。

「これより元気になることはないのでは？」と、思えるほど体は軽く、これだけ長時間寝たわりに頭は冴^さえている。これ以上ないタイミングで眼を覚ましたのではないかと思った。

外に出ると、空が晴れている。僕はTシャツを脱ぎ、ビーチへ走った。宿のおばちゃんに笑顔で手を振り、レストランわきを通り過ぎた。石の段差を駆け降りて、海へ一直線に走った。

海は暖かくて気持ちよかった。

散歩をしてから一人で食事を取り、のんびりと本を読んだ。名古屋のヴィレッジ・ヴァンガードで買った、カルロス・カスタネダの『時の輪』を読んだが、内容がさっぱりわからなかった。

昼前にネットカフェへ行き、たまっていたメールを読んだ。地元の人やバイト先の仲間に、現在の心境を長々と書いたメールを返信したあと、調べたいことを検索した。わずらわしさのない、静かで開放的な一人の時間に、自分を取り戻していくような気がした。

太陽が真上を通過した頃、しんご君が食堂へやって来た。僕は読

んでいた本を閉じ、昨日の出来事を聞いた。警察署ではなかなか話が通じず、ややこしかったらしいが、日本大使館にパスポートの再発行の手続きを聞いて安心したようだ。面倒なことは首都に戻ってからで、今は“島”の生活を楽しむと言っていた。僕はしんご君の前向きな態度に感心した。

しんご君からフルムーンパーティーについて聞いていると、チャッキーさんが現れた。続いて、レモンさんが眠そうな顔で現れた。

「ずるいですよ、昨日の夜、踊りに行ったらしいじゃないですか、なんで起こしてくれなかったんです？」僕はレモンさんに言った。

「なに言ってるのよ、起こそうとしたわよ！ 何度もドアを叩いて声をかけたのに、ゆうじ君ぜんぜん起きないじゃないの。それもご丁寧ていねいにドアの鍵をかけて」レモンさんは眼を大きくして言う。

「そうそう、ちゃんと声をかけたんだ、けど起きなかったから」チャッキーさんは人の好さそうな顔を浮かべて言った。

「そうだったんですか」僕は恥ずかしくなったが、うれしくもあった。

「もう食事は済んだの？」レモンさんは言った。

「もう、二回食べましたよ。それも、フライドライスのポークと、高級なシーフードです。奮発ふんぱつしましたよ」僕は両手を上げて言った。

「たまにはましな物食べなさいよ」レモンさんはあきれた調子で言う。

僕はガイドブックを読み、レモンさんとチャッキーさんの食事が終わるのを待っていた。

「ねえ、ゆうじ君、このあとアマ島に行くけど、一緒に行く？」レモンさんは食器を端に寄せて言った。

「行きます！ 四人で行くんですか？」僕は何も考えず咄嗟に口を出した。

「そう、あと、昨日の夜に知り合った日本人の男の子も一緒よ」

「どんな人ですか？」

「ほら、一昨日の夜、ビーチで踊っていたドレッドの男の子よ、昨日の夜、あの子と仲良くなったのよ」

「げっ！ あの人ですか？ あの人、ヒステリーのお猿さんみたいに、裸足で踊っていたじゃないですか？ 大丈夫なんですか？」僕は顔をしかめて言った。

「とても素直な子だったわよ」レモンさんは不思議そうな顔をして言う。

「そうですか、ぼくには縁のない人だと思っていました。なんか怖いな」

「なに言ってるの、すぐに仲良くなるわよ、ねえ？」レモンさんは微笑みながら言った。

「そうですよ、物腰のやわらかい人ですよ」しんご君も微笑みなが

ら言っ。

「そうですね、なら、いいんですが」僕は言った。

食事が済むと、それぞれが用意を始めた。すぐに用意の済んだ僕とチャッキーさんは、集合場所である宿の前の小道に立っていた。

「チャッキーさんはドレッドの男と話しましたか？」僕は聞いた。

「いや、ぼくは会っていないからどんな人が知らないよ。昨日の夜も、ビーチに行つてすぐに宿へ戻ったから」チャッキーさんは首を横に振つて言っ。

「そうですね、ビーチはどうでした？」僕は興味深く訊ねた。

「あれすごいね！ よくあんな中で踊れるよ。途中で頭が痛くなつたよ」チャッキーさんは眼を細め、野太い声を大にして言つた。

「どうでした？ 楽しかったですか？」

「ちよっとね」チャッキーさんは言っ。

「そうですね、たしかに大音量ですから、頭がおかしくなりそうですね。昨日の朝なんて、耳鳴りどころか、体が鳴っているような気がしましたよ。店で流れているトランスが耳に入ると、体が思い出すように、しぜんと動き出そうとするんです。びっくりですよ」

そう言つと、ホンダのスーパーカブに乗ったドレッドヘアの男が近づいてきた。

「こんにちは」もみあげからつながる鬚ひげを生やし、平べったい顔の男は言う。

「こんにちは」チャッキーさんが言った。

「こんにちは」僕も言った。

男はバイクのエンジンを切った。

「あの、今日、アマ島へ行くんですよね？ ぼくも一緒に行くことになったんです。よろしくおねがいます」僕は問いかけるように言った。

「ああ、そうなんですか、こちらこそよろしくおねがいます」男はほんわかした声で言い、丁寧に頭を下げる。

「ぼくも一緒に行くんだ。みんなチャッキーと呼んでいるよ、よろしくね」チャッキーさんは握手を求める。

「わたしはトマトです、よろしくおねがいます」足の甲にトライバル模様のタトゥーが入った男は、握手に応じた。

「ぼくはゆうじです」僕も手をさし出した。

「ぼく、一昨日の夜、トマト君をビーチで見ましたよ、あの時、すごい踊りをしていたじゃないですか？ その印象がこびりついていて、さっきまでドキドキしていたんですよ、でも、あの時とまるで雰囲気が違いますね？」僕は表情を変えずに言った。

「そうですか？ わたしもゆうじ君を覚えていますよ。黒いTシャ

ツを着て、ビール瓶びんを持って踊っていましたよね？」「トマト君は人の好よい顔かほをしていた。

「そうです！ 目についたんですか？ おもしろいですね！」僕は微笑みながら声を出した。

「そうですね、目立っていましたから、けれど、昨日の夜はビーチにいませんでしたね？ 何をしていたんですか？」「トマト君が言う。

「ああ、その頃はぐっすり寝ていました」僕は言った。僕の隣でチャッキーさんは眼を細めて微笑んでいた。

「あら、トマト君、いつ来たの？」「レモンさんの声が僕の背後から聞こえた。振り返ると、花柄のシャツを着たレモンさんがこちらへ歩いてくる。

「今着いたばかりですよ」「トマト君は言った。

「レモンさん、遅いですよ、ぼくはもうトマト君とすっかり仲良くなりましたよ」「僕は偉そうに言った。

「そう？ ならよかったわ、いい子でしょ？」「レモンさんは言った。

十六

しんご君はトマト君の後ろに乗り、僕はレモンさんとチャッキーさんに乗せ、二台のバイクは出発した。雲行きは怪しかったが、誰もそのことは言わず、アマ島へ向けてバイクをとばした。僕は急な坂道の連続を簡単に乗り越えたが、トマト君の運転するスーパーカブは何度も止まってしまった。ギアチェンジできるバイクのほうがラクだと思ったが、自分が乗っているバイクは思ったよりも馬力があつたようだ。

一昨日たどり着いたセブンイレブンへ向かった。途中、スコールにぶつかり全身を濡らしたが、アマ島に着くころにはすっかり止んでいた。

細い坂道を下り、アマ島へたどり着いた。アマ島は予想以上に小さくて、ちつぽけなその景観にあっけにとられてしまった。白い砂浜はアマ島へつながっていたが、空はどんよりと曇り、色はくすんで薄暗い印象を与えた。人がぼつぽつといたが、冷たい風が吹いていて物悲しかった。ガイドブックに載っていた夕陽のアマ島の写真が、あまりにも印象強かった。

バイクを適当な場所に停めて、海へ向かって歩いた。

「こんなものなのね、なんか期待はずれだわ」レモンさんは不満そうに言った。

「なんか寂しいですね」しんご君が言う。

「来るのがちよつと遅かったんでしよう、陽が沈みはじめています」
トマト君は言った。

「雲がなければもつときれいなんでしようね」レモンさんが言った。
僕とチャッキーさんは三人の後ろを歩いていて。

海のそばに近づいた。海は静かで、さざ波が立っていった。宿の目の前よりも透明だったが、光がないせいか、どうもぱっとしなかった。

「せつかく来たことだし、海に入る？」気分を盛りあげるかのように、レモンさんは言う。

「そうしますか」僕はその場の雰囲気になんとも耐えられず、無理にはしゃいで言った。

「そうだね、せつかく来たことだし」チャッキーさんも同様な思いらしく、そう言った。

「わたしは待っていますよ」トマト君は言う。

「えっ？　なんで？」チャッキーさんが訊ねる。

「いや、髪の毛が」トマト君は縮れた太い髪の毛の束をつまんで言った。

「そっか、不便だね」僕はしみじみと言った。しんご君はTシャツを脱ぎはじめた。

海は生ぬるかった。その海水が夕暮れの風をより冷たく感じさせ

る。わずかな波がたつ海に、はしゃぐことなく、それぞれが静かに浸かっていた。何かに脅迫きこほくされているかのように、言葉を見つけて近くにいた人間に声をかけた。

岸では規則正しい、単調な波の崩れる音がした。激しく耳をつんざくような轟音こうおんはなく、なんの意志も感情も感じられない、機械的な音が聴こえる。遠くではボートに乗った人間が何十人もいて、どうやら、スキューバダイビングをしているようだ。

「チャッキーさん、波には気をつけてください。足の踏み場を間違えますよ」僕は海底に注意をはらいながら、近くにいたチャッキーさんに声をかけた。

「ああ、わかってるよ、すごいなまこの数だね」チャッキーさんは顔を上げずに返事する。

「ほんとですよ！ なんなんですかこいつらは、まるで地雷ですよ」

僕は白い砂の上にいるぶつといなまこを見た。黒いなまこは極太のひじきに見えたが、色の薄いのが、紫の色のなまこがいて、種類はさまざまのように見えた。それに、どれも巨大に見えた。海面は虫ネガを覗くのぞようになまこを巨大化させ、虚像の姿を見ていたのかもしれないが、それでも充分に大きかった。なまこはいたるところにいた。

「ゆうじ君、なまこは踏んだ？」チャッキーさんが言った。

「いや、まだです、なんとか避けています」僕はこたえた。

「ぼくもだ」チャッキーさんは言った。

「チャッキーさん、ためしに踏んでみてください」僕は言った。

「いや、それはなまこがかわいそうだよ」

「たしかに、なまこは迷惑ですよね」僕は言った。

海面は胸のあたりを揺れている。僕とチャッキーさん以外は岸边に戻っていた。遠浅の海からみんなが小さく見えて、波の音が小さく聴こえた。

「チャッキーさん、このあたりは岩が多いです。気をつけてください」僕は言った。

「ゆづじ君も足を切らないように気をつけて」チャッキーさんの声が聞こえる。

「チャッキーさん、足を切ったんですか？」僕はすこし離れているチャッキーさんに顔を向けて言った。

「ああ、足をつけようとしたら、岩の色に似たなまこがいたらしく、硬くてやわらかい感触がしてね、思わず足をそらしたんだ」チャッキーさんは両腕を宙に浮かせ、頭を下げていた。

「それは災難ですね、やつら、カモフラージュしていますから」僕は表情を変えずに言った。

「ほんとだよ」チャッキーさんは海底から目をそらさずに言った。

しだいに海面は上昇して、首を超えてしまい、頭が浸かってしま

った。僕は手足をばたばたさせながら海底を覗いていた。波はかすかに高くなり、体を大きく揺さぶるようになっていた。

「チャッキーさん、波が高くなっていないですか？」僕は言った。返事がなかった。

「チャッキーさん！」僕は声を大きくして言った。

「えっ？ なに？」チャッキーさんの声が聞こえた。

「いや、なんでもありません」「僕は言った。

「ゆうじ君、大きな魚がいるね、はっきりと見えないけど、銀色の体がときたま素早く動くよ」「チャッキーさんが言う。

「ほんとですか？僕はまだ見てませんよ、カラフルな小魚は何度も見ましたが」僕はぎよっとなった。

「それにしてもいろいろな魚がいるよ、シュノーケルがあつたらずいぶんと楽しめるだろうね」

「そうですね、なまこを気にせずに悠々（ゆうゆう）と泳げますよ」僕は慌ただしく、手足をばたばたさせて言った。

「もっと沖に行けば、いろいろな魚がいるだろうな」チャッキーさんは平然とした顔で言う。

「チャッキーさん、そろそろ岸へ戻りませんか？深さが不安でしかたがないんですが」ぼくは言った。

「そうだね、そろそろ戻ろうか」

僕は頭から海に潜り、体をくねらせてから足をばたつかせた。体が海面に浮かんだところで、腕を大きくかいた。波は何度も僕の体を押しした。

無我夢中で泳ぎ、地面に足をつけると、海底は予想以上に浅かった。立つと水面は腰ぐらいの高さで、遠くには焚き火にあたっている三人が見えた。

後ろを振り返ると、チャッキーさんが顔を水面から出してゆつくりと泳いでいた。雲は多かったが、太陽が海面の上でその雄大な姿をさらしている。雲は燃えるような茜色あかねに染まり、ボートに乗っている人間は影絵のように黒く、輪郭りんかくをはつきとさせていた。

十七

「ねえ、わたし、待ち合わせしている人がいるの。そろそろ行かない？」レモンさんの声を合図に、五人はアマ島をあとにした。

町に戻り、パーティーがあるビーチ近くのレストランの前にバイクを停めた。目の前の通りは店が賑わい、サンドイッチ屋や串焼き屋から、香ばしい匂いをただよわせていた。明るい通りは、すでに多くの人であふれていた。

「これから来る人は、子供づれの女性なのよ」「レストランの目の前に立っていたレモンさんが言った。

「ええ？ 子供づれなの？」「レモンさんの隣にいたチャッキーさんはおつむ返しした。

「そつなの、素敵よね」「レモンさんは言う。

「行動力のある人だな、だんなさんは？」「チャッキーが訊ねる。

「知らないわ、子供と二人で来ているらしいわよ」「レモンさんは言った。

僕は通り過ぎる人を見ながら聞いていた。とんでもない親だと思っただ。

「その人もミクシーで知り合ったの？」チャッキーさんは聞いた。

「そうよ」「レモンさんは言った。

すこしすると、レモンさんは橙色たいたいのロングスカートをはいた、ふくよかな女性と大声をあげて話し出した。長い黒髪をうしろで一つに結ゆわえ、丸っこい、おだやかな顔つきをしていた。足元には大きな眼をした、浅黒い肌の男の子がスカートをつかんでいた。

レモンさんは楽しそう話をつづけ、思い出したように三人の男に紹介した。僕はその女性と小さくあいさつをかわした。だが、すずんで話をする気にならなかった。何度も体にぶつかる人混みがうっとうしかった。

「このレストランと一緒にホテルに泊まっているの。ここで話すのもなんだから、わたしの部屋に行かない？」女性はいねいに話す。

「そうね、行ってもいいかしら？」レモンさんは言った。

「ええ、もちろんいいわよ」女性は答えた。

「お部屋へ入らせてもらいましょう」「レモンさんが言う。

「僕はここでトマト君を待つので、先に行ってください」

僕は部屋には興味なかったのでそう言った。それよりも腹がすいていた。

「そう？ わかったわ」「レモンさんは言った。

「一階の部屋だから、レストランのわきを奥にすすめばわかるわ」

女性はやさしく言った。

「わかりました」僕は言った。すこしでも一人の時間が欲しかった。

五分もしないうちに、金をとりに戻っていたトマト君が来た。通路を奥に進むと、小さなプールがあり、水中はライトアップされ、ぼんやりと浮かぶように揺れていた。背の高い植物は白い壁の内装を彩るように飾られていた。

プールを左に迂回すると、白いイスに座って浅黒い子供と遊ぶチャッキーさんとしんご君がいた。

「いいところですね」僕は言った。

「ほんとだよ、部屋も見てごらん」チャッキーさんは目配せして言った。

大きな木の扉に近づくと、扉は自動で横に開いた。冷えた空気が外へ向かって流れ、整然とされた部屋がひろがっていた。ガイドブックで見るような部屋だった。レモンさんは木のイスに座り、丸テーブルを挟んで丸顔の女性が座っていた。

「あら、トマト君、はやかっただわね。この人がわたしの知り合いの吉井さんよ」レモンさんは微笑みながら言う。

「はじめまして、吉井です」吉井さんは席を立って言った。

「どうも、トマトです」トマト君はどもった声で言った。

「あ、あの小さい男の子は子供ですか？」トマト君はおそろおそろ言った。

「そう、太郎って言うの。手のかかる子でね、さっきまでわがままばかり言っていて泣いていたのに、あなたたちが来たら、あんなにはしゃいじゃって」

吉井さんは微笑みながら、チャッキーさんの腕をぽかぽかとたく子供を見て言った。

「元気な子ですね、わたしは子供が大好きです」トマト君は笑いながら言った。

「あら、仲良く遊んであげてね」吉井さんは言った。

十八

六人と一人はホテルのレストランへ移動した。メニューはどれも自分の泊まっている宿の二倍以上の値段だった。今日の朝と昼に食べたフライドライスが、急にみすばらしく思えた。僕はスズキと海老の網焼きと、ジャガイモを頼んだ。どうでもよくなり、さらにフライドライスも追加した。

それぞれ注文を終えたが、僕の隣にすわっていたトマト君は、メニューをにらみっぱなしだった。

「どうしたの？」僕は聞いた。

「いや、注文できる物をさがしていて」「トマト君は顔を動かさずに答える。

「なんで？ 持ちあわせがないの？」

「あるにはあるんだけど、最近派手に使いすぎて、節約しているんだ」

トマト君は言った。吉井さんとレモンさんは店に入ってからしゃべり続けていた。

「このメニュー高いよね、なんか節約していた自分がバカらしくなってきた、食べたいものを頼んだよ。好きなもの選んじゃえば？」僕はあきれたように言った。

「そうしたいけれど、だめだ、昨日も“たま”を三錠食べたから、パーティー分を残しておかないと」「トマト君は真剣な眼をして言った。

「“たま”を三錠？　すごいね！　大丈夫なの？」

僕はびっくりした。大麻は慣れていたが、“たま”と呼ばれるMDMAは試したことがなく、友人の体験談しか聞いたことがなかった。

「ああ、大丈夫だよ、現にこうして生きてるでしょ？」トマト君はメニューを閉じて言う。

「そりゃそうだけど、まだ“たま”をやったことないから、どんなものかわからないんだ。どうなの？」僕は興味深げに聞いた。

「すごい良いよ！　かんたんにあがるからね。“くさ”は踊るのにあまり適していないけれど、“たま”はガンガンに踊れるよ」「トマト君がうれしそうに言う。

「そうなんだ、でも、ケミカルは体に支障が出るっていうじゃん、どうなの？」

「さあ、わからないけれど、大丈夫じゃない？」トマト君は笑いながら言った。

「ぼくも“たま”好きですよ」「しんご君が口をはさむ。

「そうなの？　しんご君も？　てっきり、そういうのはやらないと

思っていたよ」僕は顔をゆるませていった。

「最近ですね、レイブに行くようになってからですよ」「しんご君は言った。」

「意外だよ、そういう話は一度もでなかったじゃん」僕は言った。

「プレーンライスおねがいします」トマト君がウェイターに頼んだ。

「それだけ？ もつと食べなよ」僕は笑い声をあげて言った。

「なに言うの！ これが限界さ、“たま”代をとっておかないと」
トマト君は顔を何度も横に振った。

「じゃあ、魚を頼んだから一緒に食べようよ」僕は言った。

「ほんと？ ありがたい」トマト君は眼を開かせる。

「そのかわり、ねたをひいた場所を教えてください」

「教えるもなにも、そこらへんで買えるよ」

「えっ？ そうなの？」僕は眼をぎらつかせて言った。

「らしいよ、わたしはビーチにいた島民から買ったけれど」

トマト君は言った。ビンビールが二本と、人数分のグラスが運ばれてきた。

「わたしも飲んでいいのかな？」トマト君が慎重な面持ちおせせで言う。

「別にいいでしょ、プレーンライスだけを頼む人に払えなんて誰も言わないよ」僕は言った。

「そりゃそうだ、じゃあ、遠慮なく」トマト君はビンビールに手を伸ばす。

「トマト君が買ったのは“たま”だけ？ “くさ”は買っていないの？」僕はさらに聞いた。

「“くさ”は買わなかったな。でも売っていた」トマト君は言った。

「ほんと！ 欲しいんだけど、あとで売っている場所を教えてくださいえない？」僕は声の調子をあげて言った。

「ああ、かまわないよ。食事が終わったら探しに行こう。ちょうど、ねたがきれて買おうと思っていたから」トマト君は人のよさそうな笑顔を浮かべて言った。

「やった！ ありがとう。魚はいくらでも食べていいよ」僕は調子よく言った。

「ぼくもついて行っていいですか？」しんご君は言った。

「もちろん、一緒に行こう」トマト君が言う。

「チャッキーさんは？」僕はチャッキーさんの方を向いて言った。

「うん、ぼくも行こうかな」チャッキーさんは静かに言った。

僕はビールを一気に飲み干した。大麻が手に入ると考えると、居ても立つてもいられず、おちつかせるようにビールを何度も飲んだ。後ろのテーブルにいた白人の団体へ振り返り、騒さわがしい声にあわせて僕も声をあげた。グラスに入ったビールがまわってきて、一気に飲み干し、さらに声をあげた。

しだいに料理が運ばれてきた。僕は普段頼むことのない料理がどうでもよく見えてしまい、食べるのがおっくうに感じられた。僕のテーブルの反対側では、レモンさんと吉井さんがあいかわらず話している。ちょこまかと目障めさわりに動いていた、髪の毛のちぢれた浅黒い子供はすっかり寝息をたてていた。

十九

食事後、レモンさんは吉井さんの部屋へ移ると言うので、ビーチで会う約束をして、子供をふくめた三人と別れた。トマト君としんご君、チャッキーさん、そして僕をあわせた四人は、人通りの少ない小道脇にある石垣の上に座っていた。

「ビーチには行かないの？」僕はトマト君に聞いた。

「この時間はまだ人が集まっていないから、おそらくプッシャーはいないよ。それなら、それらしき人間が声をかけてくるのを待つか、好きそうな日本人に話しかけるかだよ」「トマト君は言う。

「そっか、ねえ、“くさ”はいくらぐらい？」僕は指の関節を鳴らしながら言った。

「買ってないからわからない。“たま”は一個五百Bだよ」「トマト君は言った。

「たかつ！」僕は大声を出した。

「何人かにたずねたけれど、どこもそんな値段だよ」

「高いですね」「しんご君が言った。

「日本円で、約二千円か」僕はつい、日本円に換算してしまった。

「日本とあまり変わらない値段ですね」「しんご君は言う。

「そうなの？」「僕は言った。

「“くさ”はもつと安いんじゃない」「トマト君が言う。

「あつ！ 日本人だ！」

青紫色のＴシャツを着た、坊主頭の男が目の前を通り過ぎる。

「ちょっと聞いてくるよ」「返事を待たずに僕はその男に近づいた。

「すみません、いきなり失礼ですが、このへんで“くさ”が買える場所を知らないですか？」

僕は、三日月顔の、歌舞伎役者のような顔をした男に話しかけた。アルコールが僕を大胆にしていた。

「ああ、知っているよ」「男は怪しむよりは、軽蔑けいべつしたような眼でぼそつと言った。

「もしよかつたら、教えてくれませんか？」僕は男の態度に腹が立ったが、かまわずに言った。

「別にいいけど」「男は表情を変えずに言う。

「ありがとうございます。ちょっと待ってください」

僕は三人のところへ戻った。

「あの人が教えてくれるってさ」

「ほんと？ そりゃ良かった」トマト君がそう言い、全員で礼を言った。

「場所を教えてあげるだけだよ。それに、そんな大人数は怪しまれるから無理だよ」

男はやっかいなことに関わってしまったような雰囲気を出していた。

「なら、ぼくが買いに行ってくるよ。なにが買えますか？」僕は男を見た。

「くさ」と“たま”でしょ、あとは“しゃぶ”だね、”オピウム”もあるらしいけど、高いらしい」男は顔色を変えず、機械的な調子で言った。

「たま”の値段はいくらですか？」トマト君が聞いた。

「五百だよ」

「くさ”は？」僕はつづけて聞いた。

「三百」男はこたえた。

「みんななにが欲しい？ たてかえておくよ」僕は三人に言った。

「わたしは“たま”二個で」トマト君は言った。

「好きだね」僕は言った。

「ぼくも“たま”を一つお願いします」「しんご君は言った。

「チャッキーさんは？」黙りつづけているチャッキーさんに聞いた。

「ん、ぼくは、“くさ”を一つで」

「わかりました、じゃあ、行ってきますので、この辺で待っていてください」

僕はそう言つて男に近づいた。男は茶番を見るように、蔑あはんだよ
うな眼をしていた。

僕は早歩きで男の後ろをついていった。何か話しかけようとしたが、相手はこちらの顔をほとんど見なかったので、話しかけるのをやめた。無言のまま、ビーチへと近づき、エピックトランスの流れるブースの裏にあるレゲエバーに着いた。

「ここで買えるよ」男は言った。

「どうやって買うの？」僕は言った。

「あそこに男がいるだろう？ カウンターに座つて、あの男に欲しい物を言えばいいんだよ」「三日月顔の男は面倒臭そうに言う。

「わかった。ちょっと行ってくるよ」僕は真剣な顔して言った。

「じゃあ、おれはその辺に立っているよ。最近は警察が見まわっているらしいから、気をつけて」

男はそう言い、店の端へ歩き出した。

僕は薄暗い店内へ入った。ブラックライトの灯りで、壁に飾られていたレコードのジャケットは、ピンク色に浮かびあがっていた。マスターらしきやせがたの男は、長い髭を生やした白人と話し、テーブルの前に座ってギターをいじっている。

僕はカウンター席に着くと、若い女のスタッフが近づき、注文を聞いてきた。僕は男が来なかったのでどうしようかと思っただが、とりあえずチャンビールを注文した。若い女は口をゆるませ、白い歯を光らせた。僕はそれを見て、「アイ、ウオント、マリワナ」と言った。女は眼をぴくつと開かせて、陽気に微笑んだまま「ウェイト」と言い、ギターをいじっている男に近づいた。男はこちらを向き、屈託のない笑顔を浮かべ、片手をあげて英語をしゃべった。僕は笑顔を返した。

僕はチャンビールを飲みながら、蛍光色が浮かぶ店内を見まわして、目の前の酒瓶を見た。僕の四つ隣の席には白人の若い男女が静かに話をしていた。四つほどあるテーブルには、マスターらしき男と髭の男が座っているだけで、他には誰もいない。僕はいよいよ大麻が手に入ることを考えて、一人でやにやしていたが、“島”には警察が多いという噂を聞いていたので、早く事を終えて、この場を立ち去りたかった。

五分程で、やせがたの男はやってきた。英語で、ギターを修理していたようなことを言ったあと、なにが欲しいと聞いてきた。僕は慣れない口調で、大麻とMDMAが欲しいと伝え、値段を聞いた。三日月顔の男の言う通りの値段だったので、数量を伝えると、男は笑いながら「オケエイ！」と言い、店の奥へ行った。

すぐに男は戻り、顔で合図してから、ビニールのパッケージをテーブルの前へ出した。そそくさに僕は受け取り、用意しておいた札を手渡した。男は真顔で札をすばやくかぞえてから、顔をにやつかせた。僕は英語で礼を言い、チャンビールを持って席を立ち、テーブル近くにいた若い女のスタッフの顔を見た。女性の顔はよく見えなかったが、白い歯が浮かんでいた。僕の心臓は強く、早く鼓動していた。

バーの前にいた三日月顔の男に、無事手に入れたことを伝え、三人が待つ小道へ戻った。すぐにねたを確認したかったが、外は危険だということ、三日月顔の誘いの言葉に従い、男の部屋へ向かった。

男の部屋は自分の泊まっている宿と、パーティーがあるビーチの中間にあった。わりと新しい建物の二階に部屋があり、自分が住んでいる部屋のワンランク上といった感じだった。部屋は狭かったが、内装が清潔だった。

「さっそく中身を拝見してみようか」

床に腰つけたまま、僕は大きなパケを開けて、小分けにされた小さなパケを取り出した。五人はそれを囲むように、円を成して座っていた。

「これで島の生活も盛りあがるっしょ」「三日月顔の男は小さなスピーカーをいじりながら言う。

「ほんとだよ、あつし、ありがとな」僕はパケをすべて取り出し、床に広げて言った。

「ありがとうございます」

しんご君がつづけて言う。残りの二人もかすかに頭を下げる。

「いや、あたりまえでしょ、同じ仲間なんだから」あつしと呼ばれる三日月顔の男は言った。

「これが“くさ”でこれが“たま”でしょ。はい」

僕は白くて丸い錠剤が四つ入ったパケをトマト君に出し、茶色の枯葉かれはが固まったような物がつまったパケを、チャッキーさんの前に出した。

「ありがとうございます」

トマト君はそう言って、パケをつかみ、顔に近づける。

「ありがとうございます」

しんご君はポケットから財布を出し、札を取りだした。それを見てチャッキーさんも同じ動きをした。

「昨日食ったやつと同じ“たま”だ、よし！」

そう言って、トマト君も札を出した。僕は三人から札を受け取り、二つ折りにしてポケットにつめこんだ。

「うれしいね、やっと手に入ったよ」僕は満面の笑みで言い、大麻が入ったパケを手を取った。

「ねえ、この“島”でほかの“たま”を見たことある？」

トマト君は隣に座っているあつしに声をかけた。トマト君は僕と

しんご君に一錠ずつMDMAをわたした。あつしは自分の持っている“くさ”を指でほぐしている。

「いいや、ないね、この島はそれしか出回っていないんじゃない？あつしがパケに眼を向けて言う。」

「そうか」トマト君は言った。

「えっ？　なんで？」僕はパケを開けて、白いMDMAを入れた。

「“たま”にもいろいろ種類があるんだ。青とか、黄色とかね、もによつて効力が違うんだよ」トマト君は持っているパケを開けて言った。

「そうなんだ、“くさ”と一緒にだね」

僕はそう言い、パケに鼻を近づけて匂いを確かめた。嗅いだことのある、湿^{しめ}った、土臭さを感じた。

「どう？」あつしは指を動かしながら言う。

「いいね！　この湿^{しめ}ってがちがちの茶色いかたまりはいいよ。日本でも似たような“くさ”にずいぶんと世話になったんだ」僕は偉そうに言った。

「そう？　ならよかった」あつしは言った。

「地元では“やまとねた”と呼ばれていてね、見た目よりもガツンとくるんだよ。特に耳によく効いたね」

「でも、シンセミアじゃないじゃん。シンセミアのほつがクリアでよくない？」あつしが言う。

「そりゃ、シンセミアのほつがおいしいし、ずっと効くよ。でも、今までこんなような“くさ”を吸って育ててきたからね、愛着があるんだ。雑草じみたゴツゴツ感が好きなんだよ。それに、三百Bでこの量でしょ？ なんの文句もないよ。日本だったら四万円はするよ」

僕は弁解するように言った。

「それならいいけど、おれはもっとおいしいねたを吸いたいな」あつしはタバコをあぶっていた。

「そりゃ、あるならね。でもこれだけの量を吸えるならじゅうぶんだよ」僕は言った。

「なにやっているんですか？」しんご君はあつしの動きを見て訊ねた。

「ニコチンをとばしているんだよ」

あつしはそう言うと、タバコをほぐし、くずれた大麻の上にちりばめた。

「タバコを混ぜるんだ」僕は言った。

「えっ？ タバコは混ぜないの？」僕の正面に座っているあつしは、顔を見あげて言った。

「タバコが嫌いだね、いつも“くさ”だけで巻くんだ。」僕はあつしの指の動きを凝視きまじして言った。

「それだと燃えが悪くない？」あつしは言う。

「タバコの臭いが混ざるのがイヤなんだ」僕は言った。

「そう、タバコがまじるけど、いい？」

「ああ、今はかまわないよ」僕は言った。

あつしは慣れた手つきでジョイントを巻いた。

「じゃあ、いつちやいましょうか？」

あつしはそう言い、細長い巻きタバコのようなジョイントの、ねじれた先端部分に火をつけた。火は勢いよく燃えあがり、小さくなつた。あつしはジョイントを手で回したあと、勢いよく二三度吸いこんだ。先端の赤い部分は呼吸に合わせて強く輝き、青白い煙は揺れた。

「いやー、いいね」

僕は言った。あつしは何もこたえず、トマト君にジョイントを渡す。トマト君は驚くほどの勢いでジョイントを吸いこんだ。僕はそれを見て、腹をかかえて笑った。

「すごいですね！」

しんご君はジョイントを受けとって言った。しんご君は不器用に

吸いこんで、大きくせきこんだ。

「はっはっはっ、ガツンと効くよ！」

白い煙を吐いたあつしが言った。僕はせきこんでいるしんご君からジョイントを受けとり、灰皿へ灰を落とした。トマト君は眼を大きくひらかせて口をふくらませている。僕は湿ったジョイントに口をつけて、二度大きく吸いこんだ。タバコの煙の味が大麻の香りと混じっていた。僕は息をとめて、チャッキーさんの前へ出した。チャッキーさんはおそろおそろ手に取った。

「どうすればいいんだい？」チャッキーさんは小さな声で言った。

「たばこのように吸って、できるだけ息をとめればいいんだよ」

あつしは言った。トマト君が大きく息を吐く。

「ごほっ！ごほっ！ごほっ！」

チャッキーさんはジョイントを吸うと、大きくせきこんだ。耳ざわりな音はいつまでも止まらなかった。チャッキーさんは涙眼をしていた。

「それでいいんですよ」あつしは笑いながら言った。

五本目のジョイントがまわっていた。部屋の中は煙がたちこめ、タバコの煙と混じりあって異様な臭いがした。眼はしばしばして、頭は重く、体はしぜんと揺れ動いた。

ジョイントを吸い終わると、われ先にといった感じに大麻を出して、過剰かじょうな量のジョイントをあつしが巻いた。

「もうすっかり、くらくらですよ」「しんご君はとろんとした眼で言った。

「なに？ いいかんじだった？」「あつしは手に持っている巻紙の上のくずに注意して言った。

「はい、すっかりきまっていますよ」「しんご君は視線を動かさずに言う。

「この“くさ”思ったよりもいいね」「トマト君は真まっかつ赤な眼をして言った。

「ああ、ほんとだよ」「あつしは口元に巻紙を近づけて言う。

「もう天国だね、量を気にせずに吸えるっていうのは」「僕はなんとか言葉を出した。

「まったくだ。日本では、なかなかこうはいかない」「トマト君がう

なずく。

「道産子ちゆうたんしだったら大量に入るけどね、悪いねたはいくら吸っても限界がきまってるからな」

あつしはジョイントの先をひねりながら言った。小型のスピーカーからはビートのはっきりした、テンポの速い音が流れている。僕はその音に意識をとられていた。

「くさ」は安あがりだし、手軽だよ。「たま」じゃこつもいかない「トマト君は言う」。

「たま」はどのくらい効くの？」僕は聞いた。

「ものによるけどね、だいたい、二時間から四時間かな」トマト君は言った。

「ピークはそんなもんだろうね、でも、効くやつはもっと長時間効くよ」あつしはジョイントに火をつけて言った。

「そうだけれど、この“鳥”の“たま”はそんなものだろう。強くもなく、弱くもなくほど良いんだ。それがさらに追加させるんだよ。おかげで毎日あごががくがくだ」トマト君はもうしわけなさそうに言う。

「えっ？　なんで？」

僕はとろんとした眼で言った。横ではチャッキーさんがぶつぶつとなにか言っている。僕はそれを無視した。

「“たま”を食べるとあごが痛くなるんだ。気がつかないうちにあごを強くかんでしまうんだよ。なんだろう、体中から力をふりしぼるのからかも」トマト君はジョイントを受けとって言う。

「だから、ガムを噛むといいんだよ」「あつしがすぐに息を吐いて言った。

「それが、噛んでもだめなんだよ」「トマト君はそう言ってジョイントを吸った。

「“たま”はふだんからやるの?」

僕は眼を細めて聞いた。トマト君は手を横に振る。

「ふだんはやらないでしょ! レイブがあるときだけだよ、四六時中やったらジャンキーでしょ」

あつしがバカにしたように言った。トマト君は数回うなずいた。

「いや、よく知らないから」「僕はばつの悪い感じがして、どもってしまった。

「だってそうでしょ? “くさ”ならまだいいけどさ、そんなにやる必要ないでしょ」「あつしは言った。

「だめだ、もうだめだ、ちょっと外の風を吸ってきます」「しんご君は首を振りながらいきなり言い出した。

「ああ、そうしたほうがいいよ」

あつしは言った。僕はトマト君からジョイントを手渡された。これ以上吸いたくなかったが、ジョイントを口につけて勢いなく吸った。頭が割れそうに痛く、心臓の鼓動が響いている。流れている音が気持ち悪かった。

「ぼくもちよつと」

そう言って、どこを見ているかわからない細い眼で、チャッキーさんが立ち上がった。とたん、ふらついて転びそうになった。

「だいじょうぶ？」トマト君は顔色を変えずに言った。僕はあつしにジョイントをまわした。

スピーカーからは騒さわがしい音が止やむことなく流れている。僕は体を揺らしたまま黙っていた。言葉を忘れてしまったように、なにもしゃべることができず、話しつづけている二人を見ていた。ときおりジョイントがまわってきて、僕は少しだけ吸った。

しんご君とチャッキーさんは戻ってこなかった。僕は忙しく動く心臓の鼓動が気になり、今にも心臓が止まってしまうのではないかと、びくびくしていた。二人はまるで僕の方を見ることなくしゃべり続け、存在していることさえ知らないように思われた。

僕は自分自身が虫のように思えた。二人がなにをしゃべっているかわからず、笑いながら話し続ける二人を見ていて、僕は二人が憎にくたらしかった。この部屋から一秒でも早くいなくなりたいと思っても、指を一本動かすのでさえまずいように感じ、不規則な呼吸のまま体を揺らし続けていた。動きたくても動けず、ただおびえていた。

「暖まってきたことだし、ビーチも人が集まっている頃だ、そろそ

る外へくりださない？」

あつしはトマト君に言い、僕の顔を一度も見なかった。僕は小動物のように小刻みにうなずき、二人が立ち上がるのを見て立った。思わず倒れそうになってしまった。二人は僕をちらつと見るだけで、なにも言わない。僕は恥ずかしさが混じった罪悪感を感じた。二人が憎たらしかった。

外に出ると、廊下に（ろうか）しんご君とチャッキーさんが倒れていた。あつしがふたりをゆすり動かすと、力が抜けきったようにやわらかく動いた。何度か動かすと、二人は眼を覚まし、ふらふらと立ち上がった。

チャッキーさんは苦しそうな顔したまま宿へ戻った。僕としんご君は楽しそうに話し続ける二人のあとを、ただついていった。彼らはときたま振り返り声をかけたが、それだけだった。僕は早くビーチに着いて欲しかった。

ビーチは人であふれかえっていた。二人はブースに向かつて走りだし、慣れているのを見せつけるように、目立って踊り始めた。裸^は足^{だし}になり、体全身を使って踊っていた。

あつしは飛び出したあごをしゃくりあげ、体を上下に揺らして、蒸気機関車の車輪のように踊っていた。僕はそれを見て柔軟性を感じなかった。

トマト君は飛び跳ねるようにステップを踏み、長くて太い髪をざわつかせ、下を向いて踊っていた。一昨日見たときと同じように、ヒステリックな猿に見えたが、柔らかさがあった。

僕は二人に負けないよう、無理に笑顔をつくって踊り始めた。しかし、音についていけず、しっくりこない。救いを求めてビールを買ったにもかかわらず、まずくて飲む気がしなかった。

しんご君はどこを向いているかわからない顔で、操り人形のようにぎこちなく踊っている。僕はそれを見て感心するとともに、不愉快な気分になった。

僕は無理して踊ったが、音は体の芯まで響かず、どこか違和感があった。まわりには陽気に踊る様々な人種の人々がいて、その人々の顔を見るのが怖かった。笑いかけられたらどうしようと思ひ、誰とも眼を合わせないように下を向いて、一人だけ浮いているのを感じながらも、そのことに気づかないようにしていた。

僕には居場所がなかった。ビーチに来れば陽気な気分になるという期待は、すっかり裏切られてしまった。楽しく踊れない、場に取り残された無残な自分をひしひしと感じた。僕は踊るのを止めて、踊っている三人を見ながら、ゆっくりと歩いた。まるで、自分だけ違う世界にいるような気がした。

ビーチのはずれに行くとな人はまばらになり、遠くから低音が鳴り響いていた。僕はゆっくりと砂浜に仰向けあおむけになり、夜空を見上げた。空は雲が浮かんでいた。まずく感じるビールをちよびりちよびり飲み、自分の存在を感じる静けさを味わった。おもわず、顔をしかめた。意識がはつきりせず、眼をつぶった。

はっと気がつき、眼を開けた。頭は痛かったが、だいぶ思考能力が戻っていた。僕は立ちあがり、ビールビンに口をあてた。ビールは温かった。

ビーチを支配する音の出所に近づくと、人々はだいぶ少なくなっていた。左腕の時計を見ると、針は三時をまわっている。歩いて三人を探したが、その姿はどこにも見つけられなかった。

僕はビーチを離れ、宿へ向かう道を歩き、衣類にこびりついた砂をはらった。人はほとんど歩いておらず、にぎやかだった通りはずっかり息をひそめていた。帰り道は暗く、静寂せいじやくがやけに耳に痛かった。そのかわり、心は落ち着いていた。空を見上げると、ビーチで見たよりも星が多かった。

昼過ぎに眼を覚ました。二日酔いのように大麻が体に残り、頭がぼんやりする。眼を覚ましたはいいが、起きあがるのがおっくうで、ぼーっと考え事をした。

何かを思い出したように体を起こし、部屋のドアを開けると、チャッキーさんが洗濯物を干していた。

「おはよう」「チャッキーさんはゆるい声で言った。

「おはようございます」「僕は眼を細めて言った。

「昨日は遅かったの？」

「はい、三時ぐらいに帰ってきました」「僕はつすら笑いを浮かべて言った。

「そうか」

「チャッキーさんは？」

「僕は帰ってすぐ寝たよ、ぐらんぐらんだったからね」「チャッキーさんが笑いながら言った。

「昨日はたくさん吸いましたね、ひさしぶりだったからもろに効きましたよ」

「ほんと、途中、気持ち悪くてしかたなかったよ」

「ぼくもです、最後のほうは吸いたくもないのに吸っていましたよ。まったく、ぜいたくな話ですよ」僕は笑いながら言った。

「そつえばさつき、レモンちゃんが来て、二十時に吉井さんの家に集合だつて言っていたよ」

「そつか、あの人、吉井さんの部屋へ移つたんですよ」

「今日はいよいよフルムーンパーティだね」

「ようやくですね、いったい、どうなんでしょうね？」僕は笑った。

「どうだろうね」チャッキーさんも笑う。

「そつえば、しんご君には会いました？」

「ああ、さつきまで一緒に食事していたよ。なんでも、パーティーの前まで力をためておくつて言った。レモンちゃんもね」

「すごい気合の入りようですね」僕は驚いた。

「ああ、二人ともフルムーンパーティが旅行の最大の目的だからね」

「なるほどですね、で、チャッキーさんはどうするんですか？」

「ぼくは海に入るつもりだよ、シュノーケルをつけたらおもしろいだろうな、と思つてね」チャッキーさんはひょうひょうとして言う。

「あつ！ いいですね、昨日のあれじゃ不満足ですから」

「ゆうじ君も行く？」

「行きます！ チャッキーさんもう出ますか？」僕は眼をぎらつか
て言った。

「そろそろ出ようとかなと思っていただけ」

「十五分ください、急いでメシを食べてくるので」

「ああ、いいよ、ゆっくり食べてきなよ」チャッキーさんは微笑^{ほほえ}
みながら言う。

「わかりました。ちょっと待っててくださいね」そう言い、僕は宿
の食堂へ小走りした。

スタッフの女の子に身ぶりで「はやくつくつてくれ」と伝え、ほ
とんど嘔^かまずに、フライドリスを胃に流した。

早歩きで部屋へ戻り、札と部屋の鍵をポケットに入れ、隣の部屋
のチャッキーさんのドアをノックした。

近くの雑貨屋でシュノーケルを買い、麦わら帽子をかぶった長髪
の男の宿の方へ向かってビーチを歩いた。

「このへんで入るか」

チャッキーさんは海を見つづけていた顔を僕へ向け、足を止めた。

長髪の男の宿は通り過ぎていた。まわりに人はほとんどいなかった。

「いいですよ」僕は待ちわびていたかのように返事した。

Tシャツを脱ぎ、サンダルといっしょに岩の影に隠した。海にゆつくりと歩いて入り、腰ぐらいのところで短い潜水をした。髪の毛がべったり後ろへ流れて、そのうえからシュノーケルを装着した。

「わくわくしますね、チャッキーさん」

僕は後ろを振り向いて言った。チャッキーさんは水際でシュノーケルを装着しているところだ。空は晴れていたが、雲が多かった。僕は体を浮かせて水面を泳ぎだした。

海水はいままで見たことがないほど透きとおり、白い砂が波に合わせて揺れ動くのがはっきりと見えた。黒くて巨大ななまこが鮮明な色形で姿をあらわし、慣れていないシュノーケルの呼吸を誤らせ、鼻から息を吸ってしまった。

「ごほ、ごほつ、チャッキーさん、やつら、ここにもいますよ！」

僕は大声で叫んだ。チャッキーさんはシュノーケルをくわえたまま、海面から顔だけ出して、静かにうなずいた。僕はシュノーケルを勢いよく吹きこみ、威力の弱い水鉄砲のように水をとばした。

再び海面に顔をつけて、なまこを見た。グロテスクなほど大きい。潜ってなまこに近づき、腕をちかづけると、肘から指先ぐらいの大きさだった。

僕はなんどもチャッキーさんの姿を確認しつつ、さらに沖へ出た。

白い砂の海底は岩が多くなり、熱帯域に生息する生き物らしく、鮮やかな色をもつ小魚を多く見かけた。すでに足は着かなかったが、シュノーケルに慣れはじめていた。水中へ潜り、不器用に泳ぎ、小魚を眼で追う。僕はなんども、「大麻を吸ってくればよかった」と思ったが、吸ったら溺れてしまいかもと考えた。

海底はさらに深くなり、どのくらいの深さか眼で正確にはかれなかった。水が透きとおりで、逆に不気味だった。僕は海面から顔を上げ、何度もチャッキーさんの姿をさがした。チャッキーさんはさらに沖のほうでぶかぶかと浮いていた。

海底は白い砂よりも、栗色や黒茶の岩がほとんど占めて、巨大な海藻を見かけるようになった。大きな魚も見るようになり、小魚の小さな群れを見ては、顔をにやつかせた。だが、大きすぎる魚を見ると嫌な不安がよぎった。

サーフィンをしていた頃、ボードの上で波待ちをしている間に何度もイメージした映像が浮かんだ。穏やかに波待ちをしていると、突拍子もなく鮫に噛みつかれる映像だった。激しい鮫は水中から上空に勢いあまってジャンプしてしまい、くわえたままの自分の体と一緒に宙を舞ったあと、大きな水しぶきをあげて海面へ着地する映像だった。しかし、今は、いきなり目の前に鮫の巨体があらわれて、残像を見るように、気がついたら空の太陽を見ている自分の姿を想像した。そんなことを思い、鮫の姿を見かけないよう祈った。

空がすっかり派手な色に染まった頃、チャッキーさんと視線を合わせ、手の合図で確認してから陸へあがった。体には疲労感があったが、心は純粋な充実感に満ちていた。

僕とチャッキーさんは海の中の出来事を語りながら、陽が暮れる

砂浜を歩いた。

シャワーを浴びて部屋の前へ戻ると、しんご君がチャッキーさんと話をしていた。腕時計を見ると、時刻は十九時を過ぎている。大麻とMDMAが入ったパケをウエストポーチに入れて、出発の準備を整えた。

バイクはすでに返却していたので、歩いて吉井さんの部屋へ向かった。通りは活気づいていたが、昨日とさほど変わらないようにも見え、フルムーンパーティーが行われる気配を感じなかった。

吉井さんの部屋へ着くと、吉井さんとその子供、レモンさん、トマト君、そしてあつしがいた。

「あつ、来たわ」レモンさんは言った。

「みんなはやいですね」僕は言った。

「そうよ、なんていったって今日はフルムーンパーティーじゃない」レモンさんはしゃがれた声で言う。

「体調は整えてきた？」あつしが言った。

「ああ、ばつちりだよ、海に入ってぼけた頭をさっぱりさせてきたからね」僕は言った。

「そうなの？ 途中でバテテも知らないよ」あつしは嫌味いやみしたらし

く言った。

「だいじょうぶだよ」僕はそっけなく言った。

「昨日の夜はどこにいたの？」トマト君が言った。

「ビーチにいたよ。体が重くて砂浜に寝転がっていたんだ。気がついたらみんないなくてさ、一人で帰ったよ」

僕は眉をひそめて言った。

「探したけどいないからさ、てっきり宿へ戻ったと思ったんだ」トマト君は言う。

「何時ぐらいに帰ったの？」僕は聞いた。

「一時半ぐらいだね」あつしが言った。

「三時までビーチにいたよ」

「そんな遅くまでいたんだ」トマト君は言った。

「ねえ、みんな、パーティーは朝までだから、途中で疲れたり、はぐれたりすることがあると思うの。だから、吉井さんの部屋を集合場所にして、なにかあったらこの部屋に集まることにしましょう」

レモンさんはそれぞれの顔を見て言った。

「いいんですか？」しんご君はレモンさんの背後にいた吉井さんに言った。

「もちろんいいわ、ビーチから近くて最適じゃない」吉井さんは丸い顔をにこりとさせて返事する。

「ありがとうございます」

何人かがそう言った。僕はそんな必要があるのかと思った。

「フルムーンパーティーは戦いだからね、ここはいい休憩場所になるよ」あつしは言った。

「そんなに疲れるものなの？」僕はあつしに聞いた。

「ああ、一晩中踊るんだからね」あつしはこたえた。

「太郎君はどうするんですか？」トマト君はやさしい声で言った。

「一緒につれていくわ。まあ、途中で眠りだすだろうけどね」

吉井さんは子供の手をつないでいる。ちぢれた髪の子供は吉井さんのスカートの後ろにいた。

「何時ぐらいにビーチへ行くんですか？」僕はレモンさんに聞いた。

「あと二時間ぐらいしたらよ。それぐらいからビーチに人が集まってきたわ。なにかあるの？」

「いや、とくに、気になったんで」僕は言った。

「ちょっと、今日の武器を仕入れに行きたいんですけど」トマト君

が笑いながら、もうしわけなさそうに言った。

「あら、もちろんいいわよ」レモンさんは笑いながら言った。

「おれもちよつと欲しいものがあるんだ」あつしも笑いながら言った。

「あつ、ぼくも行きます」しんご君も言った。

「じゃあ、みんなで仕入れにいこうか」あつしは言った。

「ぼくも行くよ」ここにもても暇そうだったので、僕は言った。

「ああ、いいよ」あつしは言う。

「わたしたちはここにいるからね」レモンさんが言った。

「はい、ちよつと行ってきます」トマト君は言った。

四人で昨日買いに行ったレゲエバーへ向かった。

「いや、昨日もつい食べすぎちゃって」トマト君が言う。

「トマト君狂っているよ、いつか体こわすよ」あつしは言った。

「“たま”はやっぱり体に支障がでるの？」僕は聞いた。

「いくらなんでも、毎日二三錠飲んでらくるでしょう？」あつしはあたりまえだといったように言った。

「そりゃそつだ」僕は笑いながらこたえた。

「そつか？」トマト君は不思議そうな顔をしている。

「たま”を食べるんじゃないよ、メシ食べなよ」僕は言った。

レゲエバーに着き、僕としんご君は店の外で待ち、トマト君とあつしが店の中へ買いに行った。ビーチから低音のきいたドラム音が聞こえ、体がうずいたが、ビーチには近づかなかった。

「いくつ買ったの？」僕は戻ってきたトマト君に聞いた。

「四錠だよ」トマト君はこたえた。

「トマト君はバカだよ」あつしはしんご君に一錠渡しながら言った。

「ありがとうございます」しんご君は言った。

「あつしは？」僕は聞いた。

「おれは二錠だよ、“かみ”を使うから、そんなに必要じゃないんだ」

「似たようなもんじゃなか！」トマト君が声を大きくして言う。

「おれはそんなに“たま”は食べないよ」あつしは言った。

「“かみ”も買えるの？」

僕は聞いた。僕はLSDを二度やったことがあったが、効きがよ

くわからなかったので、試したいと思った。

「いや、「たま」は日本から持ってきたんだ」あつしは言った。

「だいじょうぶなんですか?」しんご君が言った。

「ああ、だいじょうぶだよ、本のあいだにはさめば、めったにばれないよ」あつしは言う。

「よくチャレンジしたね」トマト君が言った。

「前にこの“島”へ来たとき、出会った人が同じことをしていたのさ」

「そっか、じゃあ、この“島”では手に入らないのかな?」僕は聞いた。

「どつだろつ、買ったことはないけど、探したらあるんじゃない」「あつしは言った。

「そつ?」なら、ちよつと探してくるよ」僕は言った。

「わたしも欲しいから行くよ」「トマト君も言った。

「いや、トマト君はやばいでしょ!」あつしが言った。

「だいじょうぶだよ」「トマト君は言う。

「ぼくも欲しいので一緒にいきますよ」「しんご君が言った。

「それならみんなで探したい」「あつしは面倒臭そうに言った。

二十四

町の隅々を歩き、日本人を見つけては聞いてまわったが、LSDは手に入らなかった。

「これだけ探してないんだ。そろそろあきらめない？」あつしが言う。

「やっぱりないのかな」僕はあきらめきれずに言った。

「この“島”ならありそうだけどな」「トマト君は言う。

「ほら、もう二十一時半過ぎているよ、そろそろ吉井さんの部屋へ戻らないと」あつしは腕時計を見て言った。

「でも、もうすこしだけ」

僕は言った。一度欲しくなってしまったので、どうしても手に入れないと気がすまなかった。

「もうないって、あきらめて“きのこ”で我慢しなよ」「あつしはどつでもよさそうに言った。

「そうか、なら、“きのこ”食べに行く？」トマト君は言った。

「うーん、別にいいけど、“きのこ”は効くの？」僕は不満そうに聞いた。

「いや、試したことはないけどさ、さつき会った日本人の姉妹も言
つてたじゃん、『“島”の“きのこ”はガツンと効くよ』ってさ。
“きのこ”でいいじゃん」あつしは適当な感じで言った。

「わたしも試したことないけれど、まあ、“きのこ”も“かみ”に
似た作用があるって聞くからな」トマト君は言った。

「シロシビンだっけ、なにかの本で読んだことあるけど、“かみ”
とおなじ幻覚作用をひきおこす成分が含まれているんだっけ？」僕
は知ったかぶって言った。

「いや、わからない、でも、“きのこ”はゆがむって聞くよ」「トマ
ト君は言う。

「なら、“きのこ”を食べてきなよ。おれは先に吉井さんの部屋へ
行ってつたえておくから、食べ終わったらおれの部屋に来なよ」あ
つしは言った。

「じゃあ、“きのこ”にしよつか？」僕はトマト君に言った。

「ああ、そうしよつ」「トマト君は言った。

「しんご君はどうする？」あつしが聞く。

「ぼくも“きのこ”を食べてきます」「しんご君は狐眼の顔をゆがめ
て言った。

「なら、はやく行ってきな。警察には気をつけて」「あつしは言った。

「ああ、あとでね」僕は言った。

日本人の姉妹が言っていた“きのこ”が食べれる店は、泊まっている宿のそばにあった。ラスタカラーの目立つ、古ぼけた外観の店は、怪しい雰囲気ただよっていた。

店の中に入ると、緑と赤の電球がぼんやりひかり、数本のブラックライトがあるだけで薄暗かった。サンダルをぬぎ、座敷に腰かけると、長い髪の男が近づいてきた。背中まで届く太いドレッドヘアの男は、年齢以上にしわだらけだ。

トマト君が、「マツシユルームシェイクはあるか？」と聞くと、歯が数本しかない、ぼろぼろの歯茎はぐきを見せてうなづく。値段を聞くと、発音の悪い英語で五百Bだとこたえた。あまりの値段の高さに驚き、三人で確認しあってから、一人一杯ずつ注文した。

「予想以上に高いね」僕は近くにごろがっていたジャンベを手にとつて言った。

「ほんとだよ。もう金がほとんど残っていない」トマト君は言った。

「もしなくなったら言ってよ、まだ持ち合わせがあるからじゅうぶん貸せるよ」僕は言った。

「ありがとう、けれど、まだだいじょうぶだ」

トマト君はこたえた。僕はジャンベの皮のうえで指を動かした。

「トマト君は、あとどれくらい海外にいるんですか？」しんご君が小さい声で聞く。

「あと、一ヶ月ぐらいだよ」「トマト君は言う。

「ぼくと同じくらいですね。どのくらいの予算で考えてますか？」

「残り二万円前後だよ」「トマト君は言った。

「それで平気なの！」僕は驚いて声を出した。

「ああ、なんとかなるんじゃない。帰りの航空券はあるからね」「トマト君は笑いながら言う。

「それじゃあ、プレーンライスだけを頼むのもうなずけますね」「しんご君も笑いながら言った。

「マツシユールームシェイクを飲んでいる場合じゃないよ」「僕は言った。

「まあね、でも、こつこつというのは別じゃない？」「トマト君が言う。

「そう言われるとそうだけど、でも、ねえ、せつかくだからシェイク代はおごるよ」「僕は言った。

「わるいからいいよ」「トマト君は言った。

「ぼくも半分出しますよ」「しんご君が言った。

「ええ、いいよ」「トマト君は小さい声で言う。

「いや、おごらせてよ。しんご君もそう言っているんだから」「僕は

笑いながら言った。

「そう？ それなら、ありがたくシェイクを飲ませてもらうよ」「トマト君はうれしそうに言った。

「はい、そうしてください」「しんご君は言った。

「じゃあ、日本に戻ったら沖縄に来てよ、さとうきびジュースをたらふく飲ませてあげるからさ」「トマト君が言う。

「トマト君は沖縄に住んでいるの？」「僕は聞いた。

「ああ、サトウキビ畑で働いているんだ、住み込みで」「トマト君は言った。

「そんなことしてるんだ？ 完全に農民だね！」「僕は言った。

「給料は安いけど、のんびりしていていいよ。一度遊びにきなよ」

「なんか、いいですねそういう生活、戻ったら遊びにいきますよ」

しんご君がそう言うと、しわくちやの男は三つのジョッキグラスを持ってきた。ジョッキグラスにはストローがさしてあり、薄暗い店内のせいか、どろどろの液体はにごって見えた。

「ついにきたね」「トマト君は顔をしかめて言った。

「思ったよりもでかいのがきましたね」「しんご君はにやけて言った。

「さすが五百Bだね」「僕は目の前の飲み物を凝視ぎょうしして言った。

ストローに口をつけて味をたしかめると、バナナ味にほのかな土の味が混ざっている。冷たくて、見た目よりもおいしかった。

「じゃあ、フルムーンパーティーにむけて、おいしくいただく！」

三人でジョッキグラスをぶつけあい、味が口に広がるのを避けるかのように、一気に飲み干した。

すでに二十二時をまわっていたので、三人とも足早あしはやにあつしの部屋へ歩いた。通りは大きなイベントがあることを証明するように、様々な屋台が活気づいている。どの店の前にも小さいプラスチックのバケツが並び、数種類の酒瓶びんが入っていた。それらはパーティーのあるビーチで何度も見かけた。僕はビーチの混沌とした空気が町全体に及んでいるような気がして、歩調をさらに早めた。待ちに待ったフルムーンパーティーが目の前に迫っていた。

「遅いわよ、なにをしていたのよ！」

あつしの部屋に入ると、赤い浴衣ゆかたを着たレモンさんが振り返り、しゃがめた声を出した。

「なにやってたって、“きのこ”食ってたんですよ」僕は微笑ほほえみながら言った。

「あつし君に聞いたわよ、まったく、“きのこ”なんか食べて、どうなってもしらないわよ」髪をきれいに結ゆわえ、頭の小さくなったレモンさんは言った。

「だいじょうぶですよ、ジョッキ一杯のシェイクでしたから」

僕は入り口の空いているスペースにすわり、あぐらをかいた。部屋の中にはあつしとレモンさん、チャッキーさんがいた。

「ほんと、おそい、待ちくたびれたよ」「あつしが巻いたジョイントを手に持ちながら言う。

「いや、ごめんごめん、ごつついシェイクにてこずったんだよ」「トマト君は僕の隣に座って言った。

「レモンさんかわいいですね！ 浴衣持参したんですか？」

僕はにやにやしながら聞いた。レモンさんが一番狂っていると思っただ。

「もちろんよ！ 狭いバックパックの奥にひそませていたのよ」「レモンさんは大変さをアピールして言う。

「やりすぎですよ！」「僕は笑いながら言った。

「なに言ってるのよ！ フルムーンパーティーよ！ わたしはこれが目的で来たのよ！」「レモンさんがあたりまえのように、自信満々に言う。

「そうだよ、フルムーンパーティーだからこれぐらいがあたりまえっしょ」「あつしは同意するように言った。

「そうよね。あつし君」「レモンさんはうれしそうに言った。

「みんな心構えがなくていないでしょ、ねえ、レモンちゃん」

あつしはわかった風な調子で言った。僕には二人の言うことの気が知れなかった。

「わたしはね、今日、ブースの上に立って一番のパーティーピーポーになるからね、見てなさい」

レモンさんは力強く言った。僕はその言葉を聞いて、子供の頃にテレビで見たジュリアナ東京を思い出した。ふと、こういう人が喜んで台の上で踊るのだと思った。

「いいや、ぼくも負けませんよ」僕は調子を合わせ、適当に言った。

「いやいや、わたしも負けられないよ」トマト君がうれしそうに口をはさんだ。

「ねえ、そろそろ武器を入れちゃわない？」あつしが待ちくたびれたように言った。

「ああ、そうだ」

トマト君が言った。それぞれが持っているねたを出した。

「おれはまず、持ってきた“かみ”をいただくよ。“たま”はあとだね」あつしは言う。

「わたしは“たま”を二錠いくよ」トマト君が言う。

「トマト君とばすね！ だいじょぶ？」

あつしは笑いながら言った。僕はなにをいただくか考えていた。

「フルムーンパーティーだからさ！ よゆうだよ」トマト君は言う。

「きのこ”食べたのに大丈夫なの？ やめときなさいよ、おかしくなってもしらないわよ」レモンさんは顔をしかめて言った。

「レモンちゃんは？」あつしが聞いた。

「わたしは“たま”を一ついただくわ」レモンさんは平然とした顔で言った。

「なんか、レモンさんが食べるのは、意外な気がしますね」僕は言った。

「あらそう？ わたし大好きよ」レモンさんは言う。

「ぼくも“たま”を一錠いきます」しんご君はか細い声で言った。

「ぼくも同じだね」

僕は言った。「たま”の経験はなく、食べるのをためらっていたが、トマト君としんご君の言葉を聞いて食べることにした。

「あなたたちだいじょうぶ？ やめときなさいよ」レモンさんは言う。

「だいじょうぶですよ！ なんとかかりますよ」

ほんとうは怖かったが、恐れていると思われたくないのので僕はそう言った。心配されると飲む気持ちがいよいよ強まった。

「どうなってもしらないわよ」レモンさんはあきれた調子で言った。

「チャッキーは？」あつしが言った。

「ん、ぼくは“きのこ”と酒でいいよ」「チャッキーさんは浮かない顔して言った。

「そうよ、それぐらいがいいのよ、ね？」「レモンさんは感心して言った。

「まあね」「チャッキーさんは小さい声で言う。

「じゃあ、それぞれの武器をいただくか！」「あつしが仕切るように声を出した。

それにこたえるよう、全員声をあげ、無言になった。僕はMDMAをつばで飲みこんだ。

「いったね」「あつしは三日月顔に笑顔を浮かべて言う。

「ああ」「僕は言った。

「じゃあ、次はその手に持っているやついいこうよ」「トマト君はあつしの持っている、太いジョイントを見て言った。

「まったく、トマト君は欲張りだな。じゃあ、これを吸いきいたら行こうか」「あつしは床に置いてあった、三本のジョイントをつかんだ。

「そうね、そろそろ場は盛りあがるころでしょうね」「レモンさんが言う。

「あつしはどのタイミングで“たま”を食べる？」トマト君が聞いた。

「おれは中盤から後半かな。まず酒を飲みながら今食った“かみ”を楽しむでしょ、で、“かみ”の効きが弱まってきたら、“たま”を入れるかな、それが“くさ”を入れるね。とにかく長いからさ、ペース配分を考えて臨機応変にだらうね」

あつしはジョイントに火をつけた。

「わたしもにたようなもんだ。“たま”の効力が弱まりかけたら酒か“くさ”を入れてもりあげるだろう、それで、完全に切れそうになったら“たま”を食べるって感じだ」

トマト君はジョイントを受け取って言った。僕はなぜか、二人の言うことが気持ち悪く感じられた。

「ゆうじ君、“きのこ”はどうだった？」チャッキーさんがぼそつと聞いた。

「思ったよりもおいしかったですよ。枯葉臭いバナナシエイクって感じでした」僕はジョイントを受け取って言った。

「そうなんだ、ぼくも行けばよかったな」チャッキーさんは言う。

「そうですね、チャッキーさんも誘えばよかったですね」しんご君は言った。

「でも、一杯五百Bですよ」そう言って、僕はジョイントを勢いよく吸いこんだ。

「五百は高いな」

チャッキーさんはかすかに笑いながら言った。僕はジョイントをチャッキーさんに渡した。あつしは二本目のジョイントに火をつける。

部屋の中はたちまち煙で充満した。ジョイントを吸いこむ音と大きく息を吐く音、ときたま耳にひびくせきこむ音がするだけで、小型のスピーカーからはキツクの強い音が流れていた。しだいに音色は鮮明になり、眼をつぶると映像をともなうようになってきた。それを感じて、僕はビーチの光景を思い描き、首都で長髪の男から聞いた話を思い出した。今までは長髪の言っていた通りだった。では、実際のフルムーンパーティーはどうなのだろう？

僕はこの部屋にいた人間を見まわした。僕はどんなことがあっても、フルムーンパーティーをぞんぶんに楽しもうと思った。

最後の一本をチャッキーさんが灰皿に押しつけた。

「よし、暖まってきたことだし、戦いにいこうか！」

あつしは沈黙をやぶるように声をあげ、素早い動きで立ちあがった。全員なにかしらの声を出しながら動き、部屋の外へ出た。

ビーチへつづく通りに出ると、「島」にこれだけの人がいたのか？」と思うほどの人であふれかえっていた。全員、人目を気にせず、頭と体を振り、声をあげてビーチへ前進した。僕は飛び跳ねながら、焦点の定まらない視界を、さらにかきまわすように頭を振りながら、人混みを押して抜けていった。これ以上の準備はないんじ

やないかと思いつたのは、ムリやりにでもまじり込んでおもしろいかなと思っていました。

耳で聴いているのか、それとも体で聴いているのかわからない。おそらく、鼓膜こまくがやぶれてしまい、音がいつさい聴こえない体であったとしても、音は聴こえてしまうのではないかと思った。昨日と三日前に見た夜のビーチも騒がしかったが、まだ正常な空気が残っていた。だが、この日のビーチは隠していた本性をあらわしたかのように、あきらかに狂気をむき出しにしていた。力を制御する機能は奪われ、ただ、快樂の渦うずが吹き荒れていた。

人々は互いに体をぶつけあい、スピーカーから流れる音の奴隷と化している。このビーチにいる二足歩行の動物は、昔人間だった存在が理性の網をやぶってしまい、その裂け目からあふれだす欲望の虜とりこになった成れの果てのように思えた。動物の一人がその場で倒れたとしても、動物はそれを眺めるだけで、それを笑って喜ぶのではないかとも思われた。

動物達は全身からべたつく汗を流し、笑顔を浮かべている者や、眼をつぶっている者、遠い一点を見つめている者、互いに顔を合わせている者、一人として同じ者はいなかった。

動物達は、どれだけ暴れることができるかを競争して、どれだけ早く息絶いきたえられるかを競っているようだ。どれだけ、自身が持っているエネルギーを浪費できるかが、その場での唯一の価値基準だった。普段は規則正しく、正常にその役目をこなしている地球の細胞が、見えない大きな力によって暴走をはじめたかのような。上空から見たとしたら、このビーチはウイルスの群むれが盛さかんに活動し、そ

の最盛期を迎えている映像が映るのではないかと思った。

ビーチは狂っている。人々は狂っている。一人一人が狂い、ビーチの狂乱を形成していた。

僕もその一人であることを喜び、糞尿うんちを垂れ流していることを快感とするように、その糞のような欲望をまき散らしていた。ビートに合わせ、頭がもげるように、それを望むかのように首を振り、裸はで地面を蹴だっして、自分の存在を誇張こちやうするかのように体を揺らしていた。顔にはだらしのない笑顔を浮かべ、上下する景色と音に集中して、ビール瓶びんを何度も上に突き出した。体中がたぎるように熱く、なにも考えていなかった。意識はもうろうとして、いかに気持ちよく踊るかだけに集中していた。個人を超越した、得たいのしれない安堵感あんどに包まれていて、まさに天国そのものだった。

目の前のブースの上では、レモンさんが赤い姿で汚きたらしく踊っている。オレンジ色の照明が赤い浴衣ゆかたをぼやけさせて、まるで場違いな盆踊りを見ているかのように思えた。レモンさんは満面の笑みを浮かべて、淫乱な女を想像させた。だが、性欲をそそるような刺激はもたず、幼年の少女に興奮を覚える、少数派の男性を対象としているようだ。僕はレモンさんの姿がおかしく、とても素敵に見えた。

離れたところでは、黒いタオルを頭に巻きつけ、青のTシャツに青紫の麻のズボンをはいた三日月顔の男が、とがったあごを凶暴にしゃくりあげ、その鎌かまで人を突き刺す勢いで踊っている。あつしの顔には笑顔がなく、真剣そのもので、修行に來ている坊さんに見えた。レイブパーティーの求道者であるあつしの姿はおかしく、とてもかわいらしく見えた。

その近くには、ドレッド頭の、汚れた白いTシャツを着て、ベ-

ジユの短パンをはいた男がいる。裸足のトマト君は、川原で見かけるようなおっさんが、かんしゃくをおこしているように見えた。ワンカップの安い日本酒で酔っ払い、しらみの巣くう太い髪がかゆくてかゆくて、頭を振っているように見えた。そのくせ、それを恥じるように下を向いて踊りつづけている。僕はトマト君の姿が悲惨で、おもわず笑ってしまった。

僕はブースの目の前に移動し、腕を動かして泳ぐように踊っている上半身裸の男の顔を見た。男はこれ以上ないくらいに笑っていた。顔の筋肉が緩んでしまったか、理性の制御が崩壊してしまったように思えた。そのそばでは赤毛の男がわきをしめて両腕を前後させ、柔道あがりの格闘家が昔流行らせた、ハッスル、ハッスルをしていた。

ビーチを包む音は、音色の数を減らしてエネルギーを溜めると、わずかな間をはさみ、音の爆発に合わせてそのエネルギーを開放させる。レプリカのバイクに乗って、全速力でトンネルを走り抜けて晴れた空の下にとびだすように、潜在意識をくすぐる開放感が全身を駆けぬけた。

音が開いては、閉じる。音が閉じては、開く。それが繰り返された。そのたびに、まわりの人間と波長を合わせて激しく踊った。眼をすこし合わせるぐらいの人間がいれば、まったく合わない人間もいた。それに体はすべてを語っていた。それは幸福以外のなにものでもなかった。僕はこの時間が永遠に続けばいいと願った。

どれくらい踊ったのだろう、ふと、動きを止めると、別次元の世界に来てしまった気がした。まわりの人間は変わらず音に合わせて踊っていて、自分一人だけがとり残されてしまった気がした。動悸動悸と息切れがひどいことに気がつき、全身の皮膚に汗をかいていて、

背中にシャツが張りついている。頭を振りつづけていたせいなのか、頭がぼんやりとして、景色がひどくぼやけていた。僕は脱水症状で倒れてしまうのではないかと不安になり、早足でブースから離れ、セブンイレブンへ急いだ。

小道に来ると耳がキンキンした。僕は水分を補給して、あの幸福な場所へ戻ることはかり考えていた。顔は下劣に笑い、歩きながらビーチから流れる音に体を合わせて、自分を主張していた。

セブンイレブンに入り、水をレジに持っていった。僕はあまりにも喜ばしくて、体を動かしながら、知っている簡単な英単語を若い男の店員に話した。男は人のよさそうな苦笑いを浮かべて、腕を少し動かした。僕はこんな日に働いている男がかわいそうに思えた。

キャップのフタをねじって取りはずし、思いつきり壁にむけて放り投げて、歩きながら水を飲んだ。水はだらしなく口からこぼれてシャツを濡らす。足は真つすぐに歩かなかつたが、それが逆に気持ちよかつた。

ブースに向かって歩いてみると、赤い短パンをはいた茶髪の男が眼に入った。長身の狐眼の男に近づくと、しんご君だ。しんご君はこれ以上ないぐらい顔をしわくちやにさせて、見るからにつらそうな顔をしている。不幸を全身に背負った、救いのない雰囲気を出していた。

「しんご君！ 今日最高だね！」僕は大声を出した。気分がとてもよかつた。

「やばいっすよ、まじでやっばいすよ」

しんご君はどこに向かって話しているのかわからなかった。僕はしんご君の頭はおかしいのだと思った。

「しんご君！ だいじょうぶ！」僕は大声で言った。

「やばいっすよ、頭ふらふらですよ」「しんご君は体を中途半端な軟なん体動物たいのようにふらふらさせて、消え入りそうな声で言う。

「しんご君！ バッド？ 大丈夫？」僕はさらに声をあげて言った。

「やばいっすよ、やばいっすよ、でも、でも、だいじょうぶです」

「ほんとやばそうだね！ この水あげるから飲みなよ」

僕はしんご君に買ったばかりの水を渡した。

「ありがとうございます。たすかります」

しんご君は水をこぼしながら飲んだ。僕はそれを見て気味が悪い男だと思った。

「まださきはながいからね！ がんばろう！」僕は偉そうにそう言い、急いで先ほど踊っていた場所へ向かった。

僕は幸福の絶頂だった。見えている景色はかすんでいたが、そんなのはまるで気にならなかった。

ブースの近くに着いて、飛び跳ねて踊り始めた。ブースの目の前に比べると踊っている人間は控えめだったが、それでもじゆうぶんに狂っていた。僕は踊りながら移動して、少しずつブースの前へ近づいた。

ところが、さっきよりも音が体に入ってこない。リズムについていこうとしたが、ところどころ体は音に遅れた。がんばっても、音は体の中心に届くことはなく、薄っぺらになってしまった。

一瞬、なにか得たいの知れないものが体を走り、頭の中が切り変わった気がした。ふいに、僕は踊るのを止めた。自分の置かれている立場の重大なことに気がついてしまい、その場に立ちすくんでしまった。僕は踊ることに集中できず、頭の中で考え事をしてしまった。

視界はぼやけていて、聴こえる音は変だ。僕はふと、とばしすぎてしまったのではないかと考え、目の前を冷静に見てしまった。視界はまわっている。恐怖が全身覆いかぶさり、僕はびっくりした。「まだフルムーンパーティーの序盤だ。こんな状態で朝までもつのか？」と考えた。

答えるまでもなかった。僕はそのことに気がつき、顔の神経をむき出しにひきつらせて、おろおろした。もう手遅れだった。世界は

一変した。さつきまではあれほど楽しかった世界は、恐怖であふれている。踊っている人の顔を見るのが怖くなり、聴こえる音が頭をかき乱して、どこだか変な世界につれていかれる気がした。僕はその場から逃げるように歩き出した。居ても立ってもいられなかった。

楽しいことを浮かべても、なにも浮かばない。引力に引きずられて気持ちは沈み、考えたくもない想念がつきつきと浮かんでくる。動悸がひどくて、心臓発作で死ぬのではないかと恐れた。僕は水を飲めば気分がよくなると思い、セブナイレブンへ向かった。

ビーチのいたるところに飾られている蛍光色が、僕をやたらに刺激する。それこそが本当の姿であろう浮かびあがる装飾が、神経に痛いまでにとびこんでくる。装飾をできるだけ見ないように、下を向いて歩いた。音が遠くなるにつれて、耳鳴りはひどくなり、自分の深刻な状態をさらに気づかせた。視界はゆっくりと回転し、ゆらゆら揺れている。眼は見えていたが、見えていないようだった。

なんとかセブナイレブンにたどり着き、店の中へ入った。蛍光灯がぼんやりとして、さつき来たときとまるで違う。水のありかは覚えていたので、なんとか記憶をたどって冷蔵庫にたどりつき、ペットボトルの水を取った。

レジの前へ行くと、さきほどと同じ若い男がいた。僕は男の顔を見ないようにした。「この男はさつきも買いにきたじゃないか」と気づかれるのがイヤだった。気づかれてしまえば、さつきは快活に話しかけたので、こんども快活に話さなきゃいけない。そんなことを考え、僕は顔を下げて、きよろきよろして黙っていた。あまりにもセブナイレブンが静かで、時が止まっているのではないかと思った。時間が経つのが恐ろしくゆっくりだった。男が怖くてしかたなかった。

男に金を渡し、水を受け取るさいに顔をちらつと見ると、男は苦笑いをしている。僕も醜く笑い、コンビニを出た。男の笑顔が痛かった。

僕は罪悪感を感じつつも、水を手に入れたことにほっとした。暗い小道に腰をつけて、店のシャッターによりかかり、ガシャンという音を鳴らした。自分に言い聞かせて水のキャップを開けて、急いで口にちかづけた。水は流れ、冷たかったが、表面的な感じがした。それは水だったが、水に感じなかった。喉元を通ったが、水という存在がからっぽで、僕には水の記憶を感じる事ができなかった。ただの液体でしかなかった。

水を飲んでもなにもならない。僕は道に寝転がり、遠近感のある蛍光灯が幽玄ゆうげんと光る、灰色のシャッターがならぶ小道をながめた。じっとしていられず、ムカデのように手足をしきりに動かしては、何度も体の向きを変えた。

「これはやばい！ まじでやばい！」と独り言をつぶやいている。僕はそんなことは言いたくなかったが、自動的に言葉を出していた。

寝転がるとさらに景色はまわり、もう、なにがなんだかわからない。眼をつぶると恐ろしいほどの浮遊感を感じ、眼を開けて、意識を保つことに注意を払った。

僕は頭がおかしくなったのだと思った。もう二度と、あの、正常な自分の意識に戻ることはなく、このままの状態とで一生を遂げるのだと思った。僕はそう考えると身の毛のよだつ恐怖を感じて、遠い、あつしの部屋を思い出した。自分の軽率な姿を懐かしい記憶のように思い出して、激しい後悔に絶望を覚えて、親に大変申しわけなく

て泣き出しそうだった。しかし、泣くことはできず、顔を醜くゆがめるだけだった。

時間が経過すれば元に戻ると信じこもうとしたが、状況は変わらず、さらにひどくなっていた。横になっっていることが僕にできる最善の行動だったが、それがなんの救いにもならない。救いを見出せるものがなかった。

僕は独り言を言いながら立ちあがり、ビーチへ行こうとした。ビーチへ行けば、なにかが変わるかもしれないと思った。

しかし、ビーチに近づくと、知り合いに会うんじゃないかと怖くなり、道を引き返した。セブンイレブンに近づいて、この先に進んでもどうにもならないと気がつき、体の向きを変えた。

再びビーチへ近づくと、知り合いにこの異常な姿を見せるわけにはいかないと思い、道を引き返した。そして、セブンイレブンに近づくと道を引き返した。それを再三くりかえした。

ようやく、別の考えが浮かび、吉井さんの部屋へ行くことに決まった。狂った自分の姿は見せなくなかったが、すでに限界をこえていたので、素直に知り合いに助けを求めることにした。

知っているはずの道がまるで知らない道に見えた。吉井さんの部屋の場所は覚えていたが、記憶に届かなかった。いや、記憶に届いたかもしれないが、体に伝わらなかった。自分が自分でない存在に感じた。背後から自分の体をながめているようで、まるつきり別人のようだった。

道を何度も往復したが、ようやく見たことのある吉井さんの宿へ

着いた。レストランのわきを進むと、中庭は滅入りめいりそうなほど暗い。暗闇が自分を圧迫しているようで怖かったが、なんとか吉井さんの部屋の前へ歩いた。真っ暗で知り合いは誰一人いなかった。僕は泣きそうになってしまった。

すると、近くから男の声がした。僕はびつくりして硬直した。再び声がして、そちらに顔を向けると、白人らしき男性が二三人テールを囲んでいる。男の声は僕に向けているようだった。僕はなにを言っているかわからず、どうしていいかわからず、言葉にならない声を出してその場を逃げた。

僕はもう、どうすることもできなかった。ビーチへ踊りに戻ることは到底無理だ。フルムーンパーティーが目的でこの“島”へ来たので、なんとしても楽しみたかった。だが、もはや限界を超えている。パーティーの途中で部屋へ戻ったら負け犬同然に考えていたので、それだけはなんとしても避けたかった。しかし、僕は宿へ向かって歩き始めた。

ふらふらとセブンイレブンの前を横切ると、だれかが僕に声をかけた。振り返ると、見知らぬ日本人女性だ。

「あなた日本人？」女性が言った。僕は声が出ず、うなずいた。

「そうなの、なにしているの？一人？」女性は言った。

「あつ」僕はなんとか声を出した。わけがわからなかった。

「もしよかったら、わたし達と飲まない？いまね、ビーチで飲んでいて、とても楽しいわよ。他に日本人の子もいるし、ねえ？」女性には隣に立っていたあさ黒い男に顔を向けた。

「そうだよ、楽しいよ、君も来ないかい？」

背の高い男は言った。僕は男の顔を見てぞっとした。トカゲと蛇を合わせたような爬虫類に見えた。

「この人はね、日本人とのハーフなのよ」女性は言った。

「せっかくだから一緒に飲まない？ 今は買いだしにきてるところなんだ、ほら、お酒を買って飲もうじゃないか」

僕はわけがわからず、言われるがままにうなずき、一緒にセブンイレブンに入った。男が気持ち悪くて、こんな生物と一緒にいる女性がわからなかった。

二人は冷蔵庫に近づき酒を選んでいった。僕はうつろな眼をして、なにを見るわけでもなく店内をうろついていた。男の店員の存在はすでに忘れていた。僕は酒を飲むという言葉の意味を考えて、冷静に今の自分ではムリだと結論を出した。二人が冷房庫を向いている隙すきにそっと店の外へ出て、ふらふらと歩き出した。

何度も通り、慣れはじめた道だったので、迷うことはなかった。だが、道の雰囲気はまるで違い、初めて通るかのようで、なかなか進んだ気がしなかった。人通りは少なく、ビーチの喧騒けんそうが嘘うそのようだ。

宿へ着くと、自分の泊まっている部屋だとわかっていたが、初めて見るような印象を受けた。ドアを開けようとすると南京錠がかかっていて、一瞬わけがわからなかった。僕は思い出して鍵を取り出したが、視界がぼやけていたので鍵穴に鍵が入らない。おもわずだれかに「鍵を開けて！」とお願いしそうになり、顔をしかめてかんしゃくをおこしそうになった。もちろん助けてくれるような人間はいない。あと一歩でおちつける場所だというのに、入れないことがつらかった。

どうにか鍵を開けて、部屋のスイッチにしぜんしぜんと手をかけて灯りをつけた。そこは知っていたが、見知らぬ部屋だった。僕はベッドに倒れた。いぜんとして独り言は止まることなく、手足は不快感をまぎらわせるようにたえず動いていた。

なにか忘れていたことを思い出したかのように、突発的に部屋のドアを開けて外に出ては、すぐにベッドに倒れこむことを繰り返した。たまに英語を話す男の声が外から聞こえて、自分の部屋に来るのではないかと恐れ、部屋の電気を消して息を潜ひそませたりもした。部屋に来て状態は変わらなかった。

そばにあつた茶色のカバーの本は波うち、部屋のうす汚れた壁は模様が浮かび、扇風機の影は呼吸をしているように膨らふくんでは萎しぼんでいる。眼に見えるものはすべてざわつき、大きさがはつきりとわからず、形をとらえることができない。僕は今まで幻覚という言葉聞いたことはあつたが、その意味をはじめで知つた。自分の意識を制御できないくせに、どこかに客観的な視点が残り、僕はあたりまえのように見える幻覚を見て笑つてしまった。僕は自分がおかしくなつたのだと、あらためて気がついた。苦しかったが部屋が僕をおちつかせて、今の状態を楽しむ気にさせた。

はつと気がつくように冷静になることがあり、そのたびに腕時計を見た。時間の感覚はおかしく、すぐに三十分は経過した。眠つていないのに、夢を見てるようでもあり、深い考えごとをしているようでもあつたが、手足はむずむずと動いていた。この調子ならいずれ元に戻るだろうと考え、時間の流れに感謝した。

しだいに意識がはつきりするようになってきた。おちつきをとり返して、頭で考えることができた。まるで自分自身の存在が体に戻つてきたようだった。僕は復活してきたことを全身で喜び、腹をかかえて大笑いをあげた。すこし前までの地獄の時間をふりかえり、生きて戻れたことをうれしく思い、自分自身の生命力に自信をもつた。

僕は近くにあつたカルロス・カスタネダの『時の輪』を手に取り、ページを開いた。難しく理解できなかった本の内容が、おもしろいほど理解できる。本に書かれている文字が変わつたわけじゃないのに、これほど理解できたのがおかしかった。僕は本を読み続けた。生きて存在できる喜びが全身にあふれていた。

はつと気がつき、腕時計を見ると、すでに時計の針は五時をさし

ていた。いつの間にこんな時間になったのだと不思議に思ったが、すぐにビーチでおこなわれているフルムーンパーティーのことを考えた。体はすっかり元に戻り、頭はさえ、眼は驚くほど力強く視界をとらえて、踊りだしたい気分だ。部屋のドアを開けると空はうっすらと明るくなり始めている。僕はビーチへ駆けだした。

賑やかだった通りは空き瓶や空き缶、バケツが散乱している。ビーチから流れてくる大勢の人々の流れに逆らい、素早い動きで避けた。欧米人の二人の男が上空を見上げ、「フルムーン」とささやいたのを聞き、僕は空を見た。神秘的な紫がかつた空は、丸い月が圧倒的な存在感で輝いている。僕はどんな世界でも驚かずに受け入れられた。摩訶不思議な偶然の切れ端を、僕は目の当たりにした。僕はビーチへ急いだ。

ビーチはまだ音が流れていて、人々はだいぶ減っていたが、踊ることはできた。僕はエピックトランスの流れるブースの前へ、体を揺らしながら走った。暗闇と同化して広がっていた海は色を取り戻し、赤い太陽が昇っていた。狂気が蔓延していたビーチはじよじよに日常のすがたを取り戻していて、疲れた穏やかさが人々を蝕んでいた。散歩する人がいれば、一人で砂のうえに座り海を眺めている者、からみあうように抱きあう男女が寝転がっていれば、体中を砂まみれにして、顔を砂に埋めたまま倒れている者もいた。

僕は激しく踊っている人間がいるブースの前に近づいた。海に近いくところで、レモンさんとあつし、しんご君が踊っているのを見つけた。僕は走って彼らに近寄った。あつしは僕の存在に気がつくのと、疲れがたまった白い顔に笑顔を浮かべ近づいてきた。僕はあつしと笑いながら抱き合った。

「ゆうじ君が戻ってきた！ どこにいたんだい？ ずいぶん探して

心配したよ」「

あつしは笑いながら話した。僕は、あつしがこんな笑い方をできるのだと初めて知った。

「いやいや、部屋でくたばっていたよ」僕は大声で笑いながら言った。

「ゆうじ君、心配したわよ！」レモンさんはそう言って近づいてきた。

「もう、レモンさんの言うとおりでしたよ」僕は笑って抱き合った。

「ゆうじ君、”きのこ”やばいつすね」「しんご君は意味深な笑いを浮かべて言う。

「しんご君もくらった？ あれって”きのこ”なの？ もう生きて戻って来れないかと思ったよ」僕は笑いがとまらなかった。

「ぼくもやばかったですよ」「しんご君ははにかんだ。

「これで全員戻ってきた。さっきまでトマト君も行方不明だったんだ」「あつしが言った。

「えっ？ トマト君も？」僕はびっくりした。

「そつだよ、ずっと見あたらなくてさ、今はあそこで踊っているよ」

あつしは視線をそらした。離れたところで、トマト君が元気なさそうに体を動かしていた。

「そうなんだ、じゃあ、“きのこ”にやられたんだね」僕はトマト君に親近感がわいた。

「そうだよ、しんご君はビーチにいたけど、“きのこ”を食べた残りの二人がいないんだからね」あつしは笑いながら言う。

「しんご君、よくビーチにいられたね」僕はしんご君に静かに言った。

「死にそうでしたよ。けど、踊ってなんとか気を保ちました」しんご君は笑いながら言った。

「タフだね、すごいよ」僕はしんご君に感心した。

「でも、本当によかったわ」レモンさんはしみじみと言った。

「あれ？ チャッキーさんは？」僕は思い出したように言った。

「チャッキーはだいぶ前に宿へもどったわよ」レモンさんは言った。

「そうですね、残念ですね」

「よし、ゆうじ君も戻ってきたことだし、最後まで踊りつづけようか」あつしが言った。

「もちろん！」僕は大声をあげて言った。

僕は部屋にいた時間をとりかえすように踊った。MDMAが効いていたのか、それともフルムーンパーティーに戻ってこれたのがうれしかったのか、体は羽が生えたように軽く、いくら踊っても疲れを感じなかった。途中で離脱したから、自分は卑怯だと思いがすが、すぐにどうでもいいことだと思った。今は楽しく踊っていられる、それだけでじゆうぶんだった。

「ゆうじ君、わたしそろそろ行くから」化粧のとれた、ぼろぼろの顔をしたレモンさんが踊っている僕に声をかけた。

「えっ、行っちゃうんですか？」僕は言った。

「そうよ、朝の船に乗り遅れないようにしないとね」

「レモンさん、ブースのうえで目立っていましたよ」僕は笑いながら言った。

「でしょ？ 浴衣ゆかたを持ってきて本当によかったわ」レモンさんは誇らしげに着ている浴衣を見て言った。

「これから首都に行くんですね？ 長時間の移動がんばってください」

「ありがと、わたしは日本に戻るけど、あなたは長いんでしょう？ 体に気をつけて旅を楽しんでね」

「はい！ レモンさんも体につけて、ぼく、レモンさんに会えてよかったです」僕は微笑みながら言った。

「あら、わたしもよ、ゆうじ君、楽しい生活だったわ、でも、日本に戻らないとね」僕はレモンさんと抱き合った。

「じゃあねゆうじ君、旅行を楽しんでね」レモンさんはしゃがれた声で言った。

「さようならレモンさん」

僕は言った。速く動くまわりの人間達から浮いたように、レモンさんはゆっくりと去っていった。

「レモンちゃん帰ったね」あつしが近くに来说った。

「ああっ、ぶっとんだ人だったね」僕は言った。

「最高の人だったよ」

あつしは思わしげに言った。薄暗かった空はすっかりまぶしかった。

「そろそろ知り合いの人がまわしはじめなんだ、そっちへ移動しない？」あつしは言った。

「ああ、いいよ。その人は日本人？」

「そう、ナスカさんという人でさ」

「すごいね、フルムーンパーティーでまわすんだ」

「よく知らないけど、けっこう簡単らしいよ」あつしは言った。

しんご君とトマト君に声をかけて、ビーチの端へ移動した。広々としたバーに入り、二階へあがると、数十人の人が中途半端に踊っていた。大半が日本人だった。僕は日本人がこれほどいることに驚き、日本のクラブにいるような錯覚がした。

音が流れていればどこでもよかった。ビールを頼み、踊りながら飲んだ。手になにかしら持っていないとおちつかず、飲み干してすぐに新しいのを注文した。

色のあせた、たばこ色の店内は陽の光が射しこんでいる。裸足で木の床の上を軽快に踊った。床は白い砂がところどころたまっていた。

激しく踊っている人は少なく、踊るスペースにゆとりがあった。日本人が踊っている姿を見て、どれも不恰好ぶかっこうに思えた。なにか不自然な、ムリをしているように見えた。特に、女性が踊っている姿は、肌の色か、顔の形、もしくは骨格が関係しているのだろう、薄っぺらな作り物にせものようで、偽者に見えた。

また、あつしは苦しそうな顔をして勢いよく踊りだし、すこしすると壁際にひっこんだ。そのかわりにトマト君が踊りだしたが、やはりすこしすると壁際にひっこんだ。二人はかわるがわるに踊っていたが、つらそうな顔をしていて、まるで罰ゲームでやらされているかのようだった。僕は二人の動きが理解できず、滑稽こっけいに見えた。ムリして踊らずに休めばいいと思った。そのかわり、しんご君はぶ

さいくな踊りをしていたが、とても自然な感じだった。

やがて音は止み、かわりに人間の声がわきあがった。フルムーンパーティーは終了した。人間同士、近くにいた者と抱擁し合い、喜びを共有した。なにか、不自然な日常が戻ってきたようだった。

僕は踊り足りなかった。体中に力がみなぎり、まだまだエネルギーの浪費が足りなかった。あつしが近づいてきて、かたい握手をした。トマト君ともした、しんご君ともした、長いヒゲを生やしたDJともした、見知らぬ人間とも握手をした。僕は笑顔を浮かべていたが、握手をするたびに、奇怪な人形劇の仲間入りしていく気がした。

カメラの音がそこで鳴りはじめ、人々は小さな群れをつくりはじめた。小さな群れは、他の群れを吸収してしだいに大きくなり、砂浜へ移動した。いくつもの群れが融合して、大きな群れを形成した。大きな群れは、一人の人間が機械的に撮るカメラに向かって、ざわめいて、動きをとめて、ざわめいては、動きをとめた。僕はその群れのなかに潜んでいた。

ふくらんだ風船が破裂したように、みすばらしい残骸がビーチに転がっている。空き缶、空き瓶、タバコ、人間などの残骸を、それを排出した残骸が拾っていた。僕は残骸の一つだった。だが、まだふくらむ力があり余っていた。

日本人どうしがかたまり、昨晚からの出来事をそれぞれ語りはじめる。カメラの音が鳴りやむことはなく、そのたびに、日本人達は不自然に動きをとめていた。僕も、僕だけがもつ武勇伝を語ったが、たいしておもしろくもなかった。日本人達はビーチに尻をつけ、なごやかに話をしていた。僕は手に持っていた木の枝で砂浜をいじつ

ていた。

やがて集まりは解散して、疲れた足取りでそれぞれの宿へ歩きはじめた。僕はしんご君と別れて部屋へ戻った。

僕は息を吹き返し、動きを早めてポケットからパケを取り出して、大麻をほぐした。空き缶に持っていったピンで細かい穴をあけて、わずかにへこませたあと、その部分に大麻をのせた。持っていたライターで火をつけ、思いつきり吸いこみ、できるだけ息をとめた。大きく息を吐くと、うっすらとした煙が吐き出された。僕はその動きを数回くりかえした。

しだいに感覚はとぎすまされて、よりはっきりと周囲を知覚できるようにになった。僕はシャツを脱ぎ、シュノーケルを手に持ち、鍵をかけずに宿の食堂前のビーチへ向かって走り、食堂にいた若い女の子に手をあげて通り過ぎた。

海は深かった。満潮の影響で驚くほど岸が近く、海面はかすかな波を立てていた。遠くの島がはっきりと見ることができた。僕は海に飛びこみ、頭をぬらしてシュノーケルをつけた。二日前はひざぐらいの高さだったところが、胸のうえまできていた。腕を海中にむかってかき、頭から足にかけて、波うつようにやわらかく体を動かしした。

海中は静かだ。水はかすかに白くにこり、生き物がどこにも見えなかった。僕は思わず海中から顔をあげた。海は静かだ。遠くでは白人の中年が仰向けあおむに浮いていた。僕は後ろをふりかえり、岸を見まわして再び海へ潜った。

翌日の昼、チャツキーさんに会った。僕は食事を終えて、ネットカフェへ行くところだった。チャツキーさんはフルムーンパーティーのことを話してくれた。ビーチの端で踊り、夜中に宿へ戻ったと言っていた。僕はすこし立ち話をして、ネットカフェへ行った。

その日の夜、あつしとトマト君、しんご君、見知らぬ日本人の男が五六人、僕の部屋へ来た。僕は眠っていたので、ノックの音がする部屋のドアを開けて驚いた。

その連中と夜の海岸へ行き、ジョイントをまわした。フルムーンパーティーの出来事と、日本に戻るのが嫌だという話をして、みんな黙って海を見ていた。大麻が口を重くした。

深夜、パーティーがあつたビーチへ行った。フルムーンパーティーに比べると人は少なかったが、あたりまえのように盛りあがっていた。僕はその連中と踊ったが、体が重くてあまり楽しくはなかった。

それから二日間雨が続いた。僕は食事以外で部屋を出ることはなく、誰とも会わずに大麻を吸って本を読んでいた。“島”の写真を撮ろうと思っていたが、雨が僕の行動をさまたげ、どうでもよくなっていた。

フルムーンパーティーが終わってから、四日が過ぎた。朝、僕は大麻を吸って本を読んでいると、静かにドアをノックする音がした。

ドアを開けると、大きなバックパックを背負った、がっちりした体格のチャッキーさんが立っていた。

「チャッキーさん、どうしたんですか？」僕はだらしない眼つきで言った。

「いや、これから“島”を出発するから、あいさつにきたんだ」チャッキーさんは優しい笑顔だった。

「えっ？ 今からですか？ この雨の中ですか？」僕はおどろいて言った。

「そうだよ」

「別に、今日じゃなくても、いいんじゃないですか？」

「まあね、でも、出発すると決めていたから。それに雨季が近づいているし」

「すごいですね、この雨のなかを移動ですか、次はどこへ行くんですか？」

「隣の島へ行こうと思っているんだ。ダイビングの資格をとろうと思ってるね、ほら、隣の島は安く資格が取れるって有名じゃない？」

「たしかに、そう聞きますね、前からとるつもりだったんですか？」

「うん、南へ来たのもそれが目的だったからね」

「そっか、チャッキーさん行くんですね、なんかさびしくなります」

「ゆうじ君はいつごろ“島”を出るの？」

「いや、特に考えていません。のんびりしてから出ようかな、ぐら
いです」

「そうなんだ、ゆうじ君は先が長いからそれでいいかもね。ぼくは
あと一ヶ月前後だから、先を急いでしまおうよ」

「そうですね」

「じゃあ、そろそろぼくは行くよ。じゃあね、ゆうじ君、まだこの
国にいるんでしょ？ またどこかで会えるかもしれないね」

「そうですね、また会えるといいですね、チャッキーさん気をつけ
てください」

「ああ、ゆうじ君、ぼくは君に会えてよかったよ」

「ぼくもですよチャッキーさん、二人で入った海は忘れませんよ」

「ははは、そうだね、じゃあー！」

そう言って、紺のレインコートを着たチャッキーさんは歩いてい
った。僕は静かにドアを閉めた。

再び本を読み始めたが、まったく集中できなかった。さきほどの
チャッキーさんの姿が頭に残り、本を開いていたが、僕は考え事を
していた。

「昨日も一昨日も雨が降り、今日も雨が降っている。じゃあ、明日も雨で明後日も雨だったら？」

僕は部屋を出て、近くの雑貨屋へ走った。

店の店員にレインコートがあるか訊ねて、ビニールの安っぽいレインコートを買った。

部屋に戻り、空き缶で大麻を吸いながら、大麻をほぐし、ジョイントを数本作った。それを小さな皮のケースに入れて、荷造りをはじめた。頭がぼんやりとしていて、作業は遅かったが、僕の胸は高鳴っていた。

荷造りを終えて、食堂に行き、宿のおばちゃんに今日出ることを伝えた。おばちゃんは素朴な笑顔を浮かべていた。若い女の子はいなかった。

バックパックを背負い、レインコートを着た。荷物にレインコートがひっかかり、やぶけてしまった。僕はかまわず、町にはじめて着いた空き地へ歩いた。雨が体にぶつかり、心地よかった。

空き地には誰もいなかったが、すぐに一台の四駆車がやってきた。僕は運転席に近づき、港まで乗せて欲しいと頼むと、若い男は問題ないと言った。

中にいた白人とは一言も話さず、ぼーっとしているとすぐに港へ着いた。港は色とりどりのレインコートを着た人であふれていた。僕は運転手に二十Bを渡すと、運転手は不快な顔つきをして、百Bだと言った。僕は乗る前に値段を聞かなかったことを後悔して、素直に百B払った。新鮮な気分が台無しにされた。

チケット売り場に近づくと、わけもなくチケットを買うことができた。船はまだ到着していなかったので、僕は防波堤に立って海を眺め、“島”に着いた時のことを思い浮かべた。しかし、よく思い出せなかった。目の前の薄暗い灰色の景色と、雨の音が気を散らせた。宿を出た時よりも雨足は強くなっていた。

「おーい、あんたは日本人かい？」

誰かが僕に声をかけた。振り向くと、背の高い、金髪の坊主頭が笑っていた。男はゴリラのような顔をしていて、がっちりとした筋肉質の体つきをしていた。その隣にはレインコートを着ていない痩せた男がいた。

「ああ、そうだけど」僕はなにかしら邪魔されたように、ぶっきらぼうにこたえた。

「やっぱりな、フルムーンパーティーで見かけたよ。たしか、“カ
ンナビス”とプリントのはいった、黒いシャツを着ていただろう？」
金髪の男は笑いながら言った。

「ああ」僕は話すのがおっくうだった。

「ほらな？ おれの言ったとおりだ」

金髪の男は痩せた男に言った。男は雨にさらされて震えていた。片手には黒いビニール袋を持っていた。

「荷物はそれだけ？」僕は考えもなしに聞いた。

「ああ、これだけだ！」痩せた男はふてくされた顔のまま、なげやりな調子で言った。

「よかつたら、こいつの話を聞いてやってくれよ、まじで笑えるから」金髪の男は愉快そうに言った。

「おい、バカにすんなよ！ まったく、ほんとついでねえよ、あんたはフルムーンパーティーにいただろう？ おれもその日、ビーチで他の日本人と楽しく踊っていたんだよ。かわいい女の子と知り合つてな、今までにないくらいに気持ちよく踊ったさ。それで朝方、愉快的な気持ちのまま、女の子を連れて宿へ戻ったんだ。それがよ、バンガローへ着いたらさ、どうなっていたと思う？ 見りゃあ、自分の部屋の窓が割られているじゃねえか！ おれはびっくりしてドアを開けたんだ。そうしたらよ、おれの荷物が置いてあった場所に白人の大男が、全身血だらけで倒れているじゃねえか！ わかるか？ 消えた荷物のかわりにだぞ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204q/>

島のパーティー

2011年4月13日12時26分発行